

旅  
硯

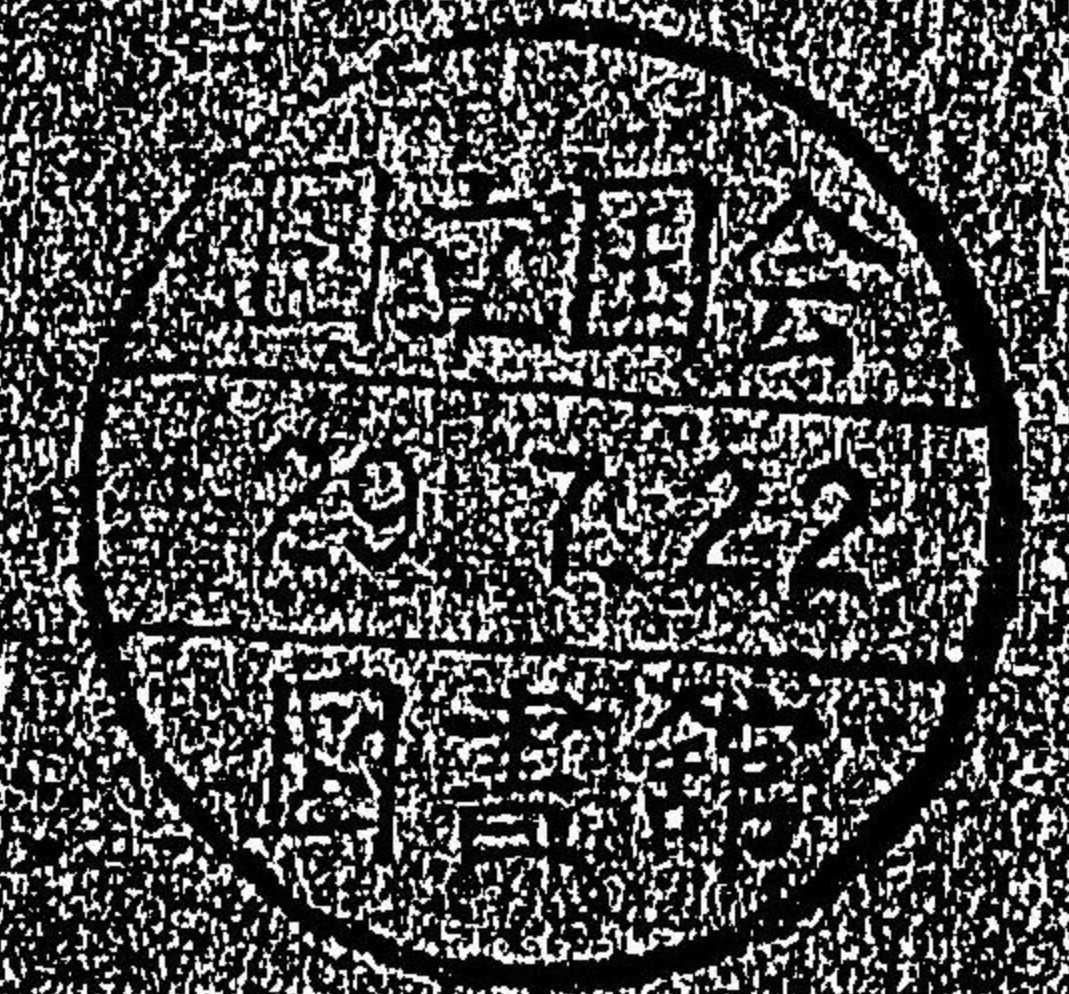
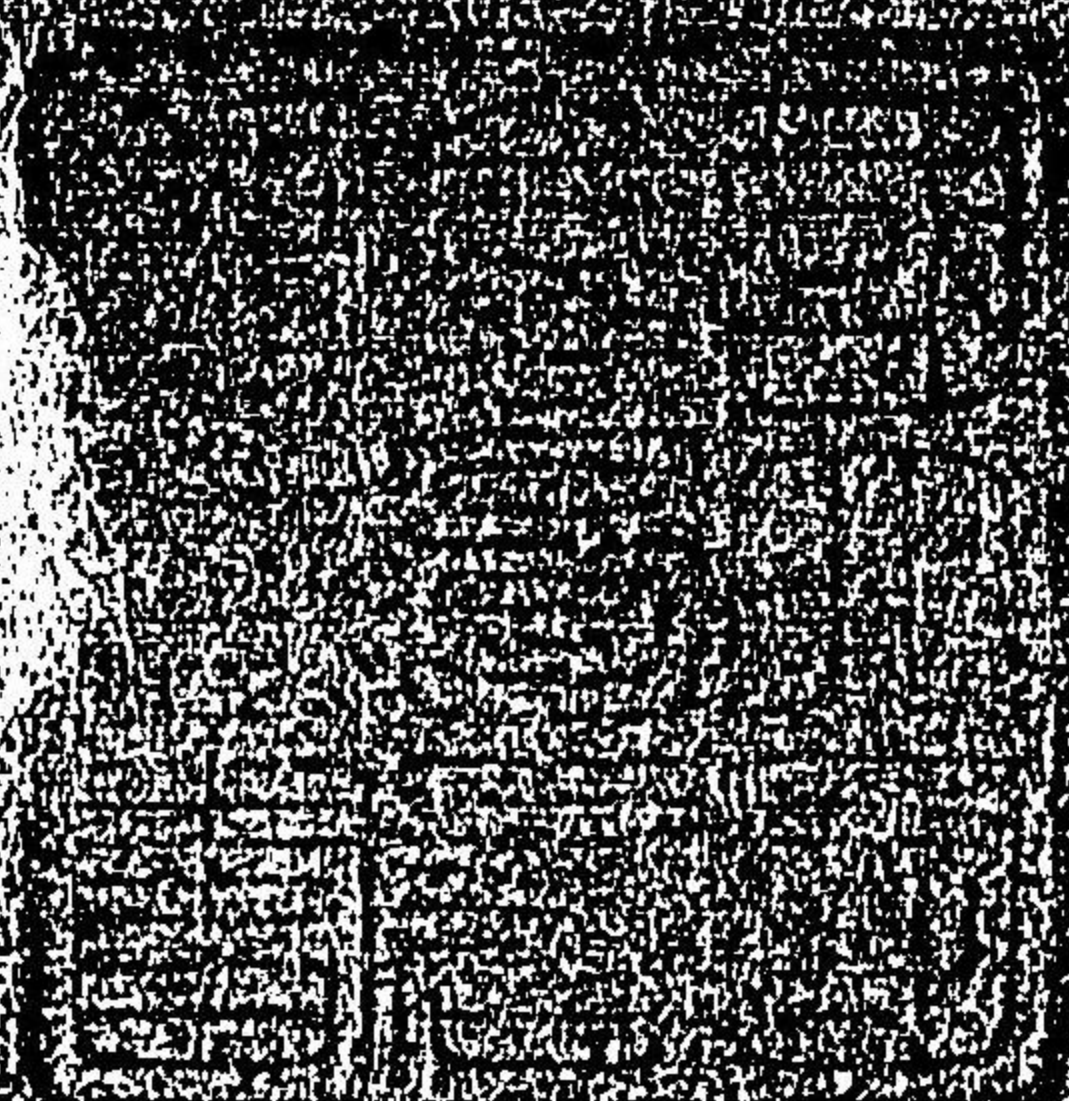
鄉食庭篁村著

915.6A 23/t

旅 視

旅 視 目 次

荒川堤の櫻	布施詣	はこね草	あきつ藻	水戸の観梅	さきがけ	二日の旅	月ヶ瀬紀行
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一六七	一六四	一五四	一四〇	一三三	一三〇	一三〇	一三〇



一  
 兩夜の月……………一五  
 新西遊記……………三三  
 紅葉狩……………三〇

旅硯目次畢

旅硯

饗庭篁村著

月ヶ瀬紀行

(一)

朝出て夕歸る一日の約束すら。花の開くに遅速ありまた風雨あり。我人ともに思はぬ障も出来て果さで過すが多き例なるに。此の月ヶ瀬行一連八人昨年よりの約束。二日の旅すら會員打揃ふは稀なれば。イザ討入の鏢際には不義士の汚名を取る人もあらんと思ひしに違ひて富岡永洗。高橋太華。幸堂得知。幸田露

伴。檜崎海運。森田思軒。關根只好の七氏と予と八人。用事といふ戀人の袖袂にまつはるを拂ひ捨て。四月一日午前十一時四十分新橋發の汽車にて。梅を慕ふて人の飛ぶ事となる。朋友知人いろくの御趣向ありて此行を壯にせらる。一行氣を得て汽車もこれが爲に響を譲ほどにのめきて立出たり。大森八景園の梅續紛と散て汽車の窓に香をおくるに早月ヶ瀬の香世界に生れかけりたる心地す。麥の穂の青は菜の花の黄なるにまじへて見馴し處もまた新しく趣味あり右を賞し左を揚げといふうち瓶酒三本折八つ外の鯛まで取そへてわづか半時に下されしは大盡舞にも聞かぬ騒ぎ。左れどまだ酒は多し中さへまだ見ぬ折包はあ

り此まゝ月ヶ瀬に行きてもどるも兵糧には事欠まじと安心のあまりか眼の皮のたるみかトロくとする者もあればイザヤ睡氣をさまさんと請將基といふことを始めて一番上りは湯呑に酒杯袋を背負た者は恭々しくこれが酌をするといふ規則を定めしが思軒氏二番上りのとき二番上りにも八分目は注ぐといふ追加規則の動議を提出し露伴子三番目に上りしときに三番にも半分は許すべしと定め四番は小々五番は猪口でも追加に追加して果は袋も罰杯と理屈て。茶碗を持つことにせしは諸も御都合次第の御法度や。藤澤邊の桃の花盛り是だけにても觀に來直打あり。箱根山のドテツ腹を蹴破るトンチルは勇壯なれど石炭の煙の外

には散で眼鼻に入るはうるさく。富士の山を硝子窓の繪と飽す  
 絶景がるとき不圖汚なき屋根などにて隠れたるは大事のお月様  
 雲めが隠すといふ童謡を思ひ出さる。御殿場を過ぎ沼津近きと  
 ころの桃と菜の花は見渡すかざり絳霞の下に毛氈を敷きたる  
 如し。午後五時半ごろ興津に着きて海水樓を宿と定む。此は名  
 にあふ田子の浦のつゞきにて振仰見れば富士は其際より巍然た  
 り三保の松原南につらなり伊豆の岬東に突出して眺望にあかぬ  
 景色筆につくすべくもなし奇石怪巖の上至上屋を作りて海水浴  
 の場とし家には廣き湯場を石にて疊て温浴場あり。浦珍らしく  
 砂地を踏むうち陰曆二月十五夜の月は伊豆岬の方より昇りて黃

金の光を波に漾はす。富士はや、朧となりて白き雲を雲の中に  
 見らうち潮をふくみし浦風が冷りと顔にあたる。月はやゝのほ  
 りても光は雲に包れて朦朧たるが尙一際面白し。油繪などには  
 よく此様ありと欄によりて眺むるうちだん／＼に月の光は雲の  
 底に微となり浪と雲との色も分かず。風は全く和て磯の臭何と  
 なく温か氣なれば雨にやならん今宵の月の惜しさよと一句詠む  
 べき勿軀振も。さすが四十里餘の汽車の揺に勞たれば海水温浴  
 に妙を叫びて此まで携げ來たる薬水を取敢ず用ふ。そほ降る雨  
 に海の音しづかなり。

船頭が多過て船が山へ上り。道傍へ作る家は助言が澤山で三年  
 経てもまだ出来ぬとか何が儲智恵漫々たる八人が銘々思案を凝  
 らす事なれば行方の道順時刻さらに定まらず。興津は海水樓大  
 に氣に入りたれば此に二三日滞留せんと云ふあれば夜の三時こ  
 ゝを過る汽車に飛乗りて翌日直に伊勢に入らんといふもありつ  
 ひに先急ぎの氣早黨勝を制して三時出立と極り旅亭の者も一同  
 徹夜我々も夜明しと更に酒事を始めしが我々が此行は日々新聞  
 にも日本一の氣障共がと稱へられし程なれば親の付けたる名を  
 戯に呼ぶは無慚なりイザ八人得意の表徳を選ぶまいか舜の八  
 元か周の八士か乃至は飲中の八仙か宋の八君子かいつれに據る

べき但しは坂東の八平氏熊野八庄司によそへつべきか八犬士か  
 八笑人か八大龍王か八天狗かど働らきを見せ合しす先づ兎も  
 角も馬鹿阿房の意味ある字を残らず集めて其中より適當なるを  
 選取る事にすべしと思軒太華露伴の三氏内典外典東西各國ある  
 とあらゆる馬鹿の字を搜り出したるが愚の味のと一字では呼に  
 くし他人が聞てもいかにも其人の名の如く思はるゝ日本製の名  
 を付んどまたく智囊を絞り直し。太郎作。甚六。三太郎。兵  
 六。拔作。猿松。鈍太郎。興太郎と列べ舉ぬ。親のつけてし名  
 にしおはいなほよしたいと人も見るかど曾根の好忠が歎ちし事  
 もおもはるゝ興の字の拙者涙ながらに興太郎を頂戴し他も分取

に詮議は收まり盃をあらためて命名式を行ひぬ  
 名は躰を顯し躰また名を現す。一行到る所ごとにて。席に侍  
 る少女等此盃を三太郎殿にこれを猿松大人にと名のみ知ら  
 せて諸其人を選まするに。笑ひながらも少女は一座をツラリ  
 と見て兵六は兵六。拔作は拔作に。過つことなく杯をおくる  
 ぞ不思議なる。後につらくおもへば皆其名の動かざる所あ  
 るに似たり宿因ありといふべきか名詮自稱と云まくのみ  
 人に心なけれど雨にかへりて心あり。三時に近し早や打立んと  
 いふ頃より烈しく降出たれば夜中飛出し説はち流れとなりサア  
 明日まで寝られるぞお前方も緩りと休めと給仕の者をも安心さ

せ。夜明し損の眠た儲け翌朝は空と共にゆるりとなり海の景色  
 を賞して又一杯。六時新橋發の汽車が十一時ごろこゝに来るを  
 待合せしづかに乗り込みぬ。此邊一重櫻の開きしが多ければ吉  
 野へ廻らん嵐山の盛りには逢ふべし杯心を花に飛ばして昨夜の  
 睡氣に躰け拔殻となる者もあり宇都の谷トンネル大井川の橋佐  
 夜の中山を輪切にして側面を見たる。新居の海の龍宮城へ乗込  
 む心地する汽車の窓をばさながらの繪の額に見て御油あたりま  
 で走りしが雨はげしくなりて窓の硝子へ千の矢先と射かくる雨  
 の足。閉たる室に息こもりて朦朧たり。よくせば熱田より直に  
 便船して四日市までも渡らんと勇みし一行も少しグニヤリとな

りて午後五時すぐるところ熱田へ着きて太息なり。宿は何處。  
 大森がよしと經驗ある拔作氏の指揮にソボ降る雨を物ともせず  
 停車場を出しが遠くも三四丁の間と思ひきや彼方此方曲りて一  
 里もあるかと思ふばかり。案外なるに鐵脚の聞えある兵六氏さ  
 へ「コイツは驚く

(三)

熱田の旅人宿大森に着く此は船着にて四日市。津。伊勢神社。  
 志州鳥羽等へ小蒸汽船にて行く者に便利よし。今宵も銘々紀行  
 をものすべし杯を洋行せぬまでにして收めよやよやくといふ  
 うちヨヤサノサといふほどの勢に兵六氏まづなりて我黨の子は

起よくと南風に煽れば一たび袈引かつぎて丸々と縮みし猿松  
 氏スルことと伸出して枕隣の三太郎氏に毒焰を吹きかく其次の  
 甚六氏呼續の濱風さそはぬうちに立上りて。宮の熱田の明神さ  
 んになどつゝむりつゝ四人縮ふ如くなりて宿を出づ。我喟然と  
 して歎ずれば拔作氏も大いに四氏の輕舉を批難し文學と道德の  
 關係など染々と物語り。更けもて歸らねば燈細くして眠に就か  
 んどす。太郎作氏はさすが年の甲斐に酒さへ愼しみて紀行つゝ  
 る筆の紙の上に音するまで靜に一人別間にあり。鈍太郎氏一人  
 鼾の聲を岸をうつ浪の音と競ひたり。宿の人も戸を閉ぢて熟睡  
 せり。トばかりありて戶外の方俄かに騒がしく恰も海嘯の寄す



るかど疑はれドツト笑ふ聲また狒々といふもの、叫ぶに似たり。スハヤ面白からぬ待遇にあづかりて軟派の四人が歸りしぞ音せでしばし外に立てて濱風に熱を吹きさまさせよといふうち表の戸を破よと叩くのみか太郎作氏がまだ寝ね机の燈を見あてに礫を投げつけて三階の窓硝子を微塵にせんとす。これに驚きて戸を開けばツト跳り入りて手にく我々の着たる袋を剥ぎ取る。赦せと合す其手を取りて引ずり起しサア酒だア、面白かつた話だけ聞かせてやれば起よくと宛然吉良邸へ義士の討入し勢。脱るゝ炭部屋もあらばこそ太郎作氏四人に取圍まれて盡し責苦。拔作氏も我も災ひのがれず引起されて夜の明くるま

でお守役四人は騒ぎくたびれて我ど倒れて睡るころ夜は白々と明け渡りぬ。此夜太郎作氏の勤めは五十年來覺えざる大苦戦なりしとぞ。然ありしなるべし我もまた是ほどの洋行者を見たる事なし。嗚呼洋行者の羽振天下無敵といふべし  
 三日。昨日どかはりていと麗なり昨夜の洋行者今朝はタロくと天氣と共にいと長閑な顔付なり。一行は便船して神社まで行かんといふ我は船といへば竹屋の渡しにさへ額をおさへる弱虫なれば四日市まで渡りて夫より汽車と人力車にて諸氏におくれず伊勢に入らんと其支度にて蒸汽船に乗る。本船までの解一里もあり霞わたれる春の海面氣も晴れて船量少しもなし。汽船に

乗組の者は押も分られぬほどなれど上等には入る者少なくて左のみ窮屈も感ぜず四方八方の話に入興して四日市に上る事も忘れ津も過ぎてつひに神社まで一行と共にしたり左れ船中用心に用心して水一滴菓物一だに腹に入れず朝より午後五時過ぎまで渡海なれば神社に上陸せしときは餓に堪へず何なりと認めせんとおもへどまた一行に後るゝも憂く猿松氏が土地通に車の相談なりしに氣は少しく確になり帯堅くして車の上に昨夜の苦みの夢を見る。六時ごろ古市の油屋に着く。着て先づ此にて落合ふ等の須藤南翠氏の消息を問へばまだ着さずといふ左らば電報をかけんと料紙を取り寄せ筆を墨に浸すときバタ／＼にて只今

お連様がどの取次。オ、と皆安心。心做しにも須藤氏の容貌一段美しかりし。直に一行より東四郎の名を贈りたり

(四)

災が福とは此事。痴情の極み齋宮といふ者が遊女おこんを斬りたる其時はさぞ此の油屋の厄難を蒙りしならんにこれを芝居狂言に仕組れ齋宮の名を貢と働らかせ面白きに其狂言津々浦々まで行はれ伊勢の古市の油屋と頼まぬ廣告行渡りて参宮の道者家見物ながら話の種と此に泊りて繁昌此地に並なし左れば今も現に庭中におこんを祭し祠あり實に此おこん此家の福神また守神ともいふべし。今の主見る所ありて斷然舊業の貸座敷を廢め

堅氣の旅人宿となりてます／＼輝る油屋の名ぞ芽出たき家居の立派取扱ひの深切まだ其の上に極上等の旅籠料三十五錢にて二膳付の饗應さすがの一行も氣の毒に思ふほどなり。間敷五六十疊敷五百あまり店を入りて廣き廊をめぐり／＼入り側附きの大廣間こそぞ音頭踊場なりと椽に出て不圖下を見れば庭は數丈の下にて見渡す山々さながら園中の觀あり。驚きは今さらなり。斯く宿はよし大坂より東四郎氏は鋤合せの好都合に着く一行歡聲をあげて杯をめぐらす（東四郎氏は午前六時大坂を發して草津より關西鐵道を津まで續ぎ夫より十里ほどをわづか四時間に古市まで來りしなりと）予は東四郎氏に久しぶりに逢ひし悦

びの外に一の悦びありそは昨夜は硬派も四人軟派も四人正半數ながら酒力によりて負けたるなれど東四郎氏は無論我黨硬派の一員今夜よりは敵は四名味方は五名すべて多數にて決する筈なれば是より天下穩かにて夜を安く睡らるべしと思へばなり。諸彼の有名伊勢音頭の踊は備前屋杉本と二軒あり此の踊だけは黨派の如何を問はず國家問題として一見すべしとの事にて硬軟九名打ち揃ひて押出し萬野然たる仲居の指揮に従ひ銀燭の光まばゆき踊の座敷に並ぶ。一柝して舞臺勾欄セリ出しまた一柝して提灯上より燈り又一柝左右兩側に並びたる琴三味線鼓弓の役の遊女調子急しく奏で始め又一柝兩花道より一様の裝束したる

遊女十四五人づゝ踊りながら山で舞臺にて入變り左は右へ右は左りへ入りて終る此の一切の見物料客何人にて金二圓なり其音頭はガチャ／＼して何を謠ふか分らず其踊は猫のチヨツカイ鮒が緒を振るが如く馬鹿々々しくも阿房らしきものなり道者惑はし郷者嚇し予は呆れて逃ぐるが如く先に歸りしが軟派の目にはこれ天人の來迎とも見えたりけん座をかへて洋行の支度をはじめ硬派の頭領とたのみたる拔作氏脆くも敵に降參し鈍太郎氏また頭巾を脱いで軟派となり新參の東四郎氏すら半軟派に化し去しぞうたてける。太郎作氏は心軟の外硬鬚に義理を立て澁々我輩に付合れしは氣の毒なりし宿へ歸りしは十二時に近し

鬼の居ぬ間今夜こそ明日まで目も心も休めんものと頭が枕に馴染かけるときゴト／＼半軟の東四郎氏歸り來たり全く以て軟化せし譯にあらず實は軟中に入りて彼等を硬化させんと謀りしなりこれを苦肉の計といふ拔作氏も我輩と同じ考へ豈敢へて軟派に降らんやなど下らぬ陳辯タド／＼また寢そびれて下手向など手帳に書くうち夜は明けて軟派總勢大威勢にて立歸りしが反間苦肉の計どころか拔作氏は昨夜軟派に降りしばかりなるに此人大に軟骨ありと軟派一同に推登され忽ち兵六氏の座位を越えて軟派の首領となりしぞ怖しき

(五)

四日の朝宮巡りにとて出づ白井氏案内して宇治橋を渡り一の鳥居前にて車を下る此邊禰宜殿の家や細々しき賣物店ありて雑沓たるを神苑會にて皆取拂ひ其跡を公園地のごとく花木を植えて清らかにしたるは神の御心にもよしとや見玉ふらんと尊し平生は我慢の一行も鳥居を入りてより何となく謹直になり人なみに御裳川の岸に下り立ちて手水なし進みて内宮正殿の御前にぬかづき心の底より尊敬の念を起し身も清々しくおぼえたり宮の四方を巡り拜し御稻の御倉御池に臨み末社々々を拜して五十鈴川にかゝる橋を渡りて風の宮に詣づ此橋より川上川下を眺むるに神々しさ一入にて秋ならましかばなどおもはる子良の館御殿等

見めぐりて山神の社子安の社の方よりまた元の一の鳥居の横に出づ神苑會の公園には梅も櫻も咲まじへたり  
 神路山五十鈴川とも常みる山川と異なりて神々し只宇治橋の橋下に汚なき男ども立つとどひ網を手にくくして錢を投げよといふはうるさしこれも土地の名物とするにや是なくは尙信も増さん  
 になど思はる合の山のお杉も玉は觀物並の小屋となれりこれも只貧民が錢を貰ふだけの便ならば此の五十鈴川の清き流を汚さずともと思はる  
 二見の浦に行かんと車を走らす途に荒木田守武の社ありと聞しかど十輛の車並び走するなれば一人抜けもならで行々も彼の山

此森はなど車夫に問へど聞えぬにやよくも答へず午後一時過るころ二見が浦につく繪によく見る立石には注連はりて傍らの磯に神官らしき者の居るところあり汐は退きてあれば皆濱へ下りて立石に上りなどして富士や見ゆるなどいふこゝにて遊ぶうち白井氏の心しらひにて賓日館といふ小紅葉館ともいふべき俱樂部部やうの處へ案内せられ此にて晝餉したむ此海水浴はよき所にて尊きわたりの方の立寄りせ玉へる事もありとて土地の人は榮と誇る此の建築をさへ珍し立派なりとて幾許の料を出し見物する者さへあり參宮道者の質朴おもふべし我々が居たる間に男女の西洋人此に案内されて見廻して居たり見て何と思ひけん

聞まほしかりし。此邊貝細工賣る店多し御鹽殿とて神宮へたてまつる鹽を此に製して納るところありまた磯邊と後の山々に名所いと多しと聞しがまた車に急がせられて夢半分揺られて油屋へ戻る。途より太郎作殿の車見えずいかにせしと待ど來たらず暮方にやがて宿にかへり諸君は必らず外宮へ參られしならんと貝細工見ておくれし車を急がせつひに道を違へたるなり夫ゆゑ合の山より車を棄て買物せんとて探しながら歸りしといふ。買物とは何ぞと皆問へば。髯を握りてナアニ蕨を二把探したのだと答へしは流石硬派の老將軍實に最硬派の予と太郎作氏は首陽の山に分け入らでは協はぬ問題がまた燃上りてありしなり

(六)

伊勢一國は知らず。山田古市神社其他參宮街道は全く内外の宮へ參る道者の爲に賑ふなり。東京大店の本店松坂に多きも此地諸國より入り來る者多く産業起し易きより基本を此に開きしなるべし寶永の御蔭參りは日本中を動かし夫より十年十五年ごとに御蔭參り拔參り主親の許さぬ旅も神の導びき玉ふとて咎もななく五畿七道の民一たび伊勢へ參らねば一人前とは云はぬほどなりしゆゑ御師といふもの國々を受持して繁昌を極めたり左れば土地の人の話にも春は道者の笠と笠往來に摺れあひて宛然一雨後の秋の山に葺の生出し如くにて横切りては向ひ側に行かれ

ぬ程なりといふ。しかも其道者眞底信心の者は少なく一生の樂み名譽の保養旅ゆる京阪の者は道中に花美を盡し江戸講中は太々神樂に金を散く。京阪道者の賑やかさ一九の膝栗毛の左の文にて其陽氣さを察すべし

上略中にも都がたの若き人々小袖の上に揃ひの浴衣を引ばり藝者めきたる男女打まじりて飾り立たる葛籠馬を曳ながら「チ、ハ、ハ、チン／＼エイ／＼ござれ都の名所見せん祇園清水やれ音羽山ヤアトコナヨイウヤサアめりやしこりやし此何でもせエー云々  
また後の條に

上略 上方道者大勢揃の形女まじりに聲張上げ「すけんぞめ  
 きは阿波座の鳥ソリヤサ可愛々々もヤアレ格子先ヤアトコサ  
 よういごナありやゝこりやゝ下略  
 春めきて浮立たるさま他の道者もまた嘸なりしなるべし太々を  
 打つといふは廿五兩以上の大金なりしといへば是はまた一際全  
 盛なりしならん斯く金を持たる道者が悠々と一日に七里か六里  
 の道を練りし事なれば道中の沾は知るべきなり。今は信心とい  
 ふ事は何事にも冷たるうへ伊勢へ行く時日と金あれば東京見物  
 に出るといふ者も多く汽車汽船人力車の便利にヤアトコセーの  
 陽氣も馬鹿らしく禰宜神官が奔走するを外見として太々を打つ

江戸講中は皆無なり此地の繁榮以前に勝らんことを願ふも覺束  
 なかるべし渴きし土の水を吸ふごとく道者で見ればヒスコクす  
 るだけの事にては參宮鐵道と通じても夫ほどの賑ひはあらざる  
 べしと思はるゝなり今一層土地の産業を盛にし今一層規模の大  
 なる觀物建物其他大公園として田舎の人が樂み悦ぶべき工夫を  
 凝らさずば是より先の大繁榮は期しがたかるべきか硬軟兩派九  
 名は白井園田兩氏の案内にて杉本の踊を見る是は昨夜の踊硬軟  
 とも不評なりしゆゑ兩氏憤然として愛郷心を起し此をも見比べ  
 て偕評判ありたしどの事なり。杉本の方備前屋と比べて規模は  
 やゝ少なれど踊の振といひ唄の調子と云ひともに優れたり藤を



求めんとせし硬派の老將すらわざと眼鏡を取りて膝前を直し氣を込めて見る有様は切子の齋藤太郎左衛門然たれば軟派の喝采アラ有難の影向やと手を合せぬばかり敷物に座の跡つけて立かねるを白井氏イザと促がして此を出て此地第一等の料理店と聞えたる聚遠樓(朝吉)へしるべす此地第一等といふ蕪子舞子等座に侍りて興を助く白井園田兩氏元より軟派なり軟派萬歳聲中に予は埋られて壁に向ひて居りしが切齒しても面白さにかなはず今や誓の珠數を切りて軟派に降らんと欲したり

(七)

五日未明に予は東四郎太郎作の兩氏と共に軟派を殘して伊賀の

地へ入らんと夜中より其の用意する中へ軟派の前首領兵六氏ヒヨコリ歸り來て我も硬派に伴はんといふ。足手まどひなれど改心しかゝりたる者を今見放しては救世の旨意にあらず左らば四人にて月の瀬入の先を驅けんと大勢ひなりしが果せるかな不潔の軟派加はりし爲め出がけに人力車が間にあはず彼是するうち午前三時の出立は六時となりぬ。予は氣を焦ちて先へ車を飛ばせたるが一人早しとて跡が續かぬば詮なきゆゑ外宮前に車を止めさせ參詣せんとすれば車夫は苦りて左様して居ては跡のが先へ行き抜ますと云ふに夫も尤ども鳥居前に進みて遙拜しさてまた車に乗りしが何をして居るやら跡は續かず常に携へ居る小堀

に水を入れんとて車夫に命じて或家の水を乞はせしに皺だらけの爺つらく見て私の内の水は悪いからお汲になつてもと手を振て断る憎さ車夫はブツ／＼云て其邊の路傍の井戸にて汲み來たれり後に聞けば無代乞ふ水を快よく與ふる如き迂濶者はなしといふ。東四郎氏を乗せたる車夫わづか一里ほど來て腹が痛めば車を代へるといひ他もまた向ふより來る車を見ては客を賣らんとする事絶ず油屋にて堅く約して來たりしなり替事せずと曳くべしと云ばイエナニ何處で替へても能いと云付ツて來ましたと澄したるものにて相變らず車を見ては賣らんとすれど直段折合ずして只徒らに暇取るばかり。松阪の焼失跡を慘ましく見て宿

の中程に休む此にて又車夫同士の替事論判始まりてほとんど一時間ほど肝を煎らす。ついに賣物となりて先より一層汚なき車に揺られて雲津を過ぎ津に着く。途中巾二尺丈二間餘の細長き小車に妻子を乗せて自ら挽きて參宮する者ありまた賃を取て旅人を挽くもわり緩くりして面白し是等やまたは三寶荒神などいふ馬に乗りて參宮せばさぞ長閑なるべしなまじいに鐵道なり人力車あるゆゑ途中ぶら／＼もされず古市より津まで十里餘りの道しかも平坦にて些の變化もまた景色のよき處もなきをガタ／＼と唾く挽るゝ辛よと歎つ。左ど津の停車場に十一時三十分までに着ば伊賀の上野を緩り見物する事は出來得べしと心だの

みにせしに。車は停車場より手前三四丁のところへ來るときは  
 ニーといふ響は聞えて汽車は走り出したリシヤ残念今少し早く  
 ばと四人同じ言を出せしが是も前世の業と諦めて車夫も叱らず  
 停車場前の茶屋に力なく入りて偕次の發車はと問へば二時なり  
 といふ。然らば跡の軟派も夫までには落合ふべしと鶏一羽買取  
 りて晝の支度を頼むと云付置てせめての暇塞ぎに津の公園地に  
 上る此はもと藤堂家の庭園なりとて築山泉水より樹石の排置甚  
 だ高雅にてよき公園なり折しも祭禮なりといへど人は雜沓もせ  
 ず梅も櫻も咲き合て今朝よりの不快の氣は皆な忘れ果て妙を賞  
 し。縁は異なるもの東京を出る時の心に津の公園といふこと聞ん

どだにも思はざりしに。此公園よりは海さへ眺められて東京の  
 上野と御殿山を一にしたるやうに景色よし餘りに景に浮かれて  
 又發車に後るゝなど前に懲りて茶屋に歸れば羹にふく繪ならで  
 鶏鍋の支度調ひ居りて又四人を悦ばせり

(八)

急ぎに急いで十里車を走らせ。そしてアケラカンと二時三十分  
 待つとは随分よき出来なり斯いふ時には鶏の調理の出来上つた  
 其處へ跡の連中が驅付て是は御造作など、突然鍋の掃除をして  
 仕舞ひ此方はアツと云たまゝ指を脚へて空腹を堪へるやうにな  
 るも知れぬと内から退をつけて噂のうち果して跡連ドヤ／＼と

入り込み此等で鶏鍋は氣が利て居る併し肉が硬派では恐れる杯  
 と相變らず大元氣。二時の汽車に乗る一身田の堂を右に見て下  
 庄龜山關と過ぎて柘植の停車場に着く此道は鈴鹿の山脉に沿ふ  
 て絶景なり關にて草津の方より來る汽車を見れば洗ひし如く濡  
 れて山には墨の如くの雲掩ひてあれば必らず驟雨あるべきぞ柘  
 植より伊賀の上野までは五里ほどありといふに降られては一大  
 事津の茶屋の主が柘植には人力車總數十一臺よりあらず九人揃  
 ふは覺束なしと心づけたれば此一系列車のうちに三人上野行があ  
 つても我一行に不足なり此は非常の働らきなかるべからずと我  
 輩特に敏活の三太郎氏を選抜して人力車申付掛とす汽車が柘

植に止まるや否や三太郎氏戸を蹴破るやうに飛下りて車九挺を  
 立地に命ず。我々靜に汽車を下りて見れば此邊はや一雨ありし  
 と見えて道は濶り居たり成程車は十一臺で總仕舞なるべし九輛  
 のうちには餘ほど怪しい車も夫も交りたり四方の山々雨雲重な  
 り今にも翻れん光景なり急げとばかり飛乗ば車夫も氣を得て勇  
 ましく走る。走りてや一里餘も來たりし田甫道にて中に挟ま  
 りて駈ける甚六氏の車の梶棒飴の如く曲りて中より折れんと  
 す、アナヤといふにも聲出ぬほどの危なさ、機一髪、車とまり  
 て顛覆せざるうちに下立れたるに皆々ホット息したり、代りの  
 車をと云た所で一里も行かねば心當りはなしといふ此に於て車

掛りの三太郎氏自ら責任を負ふてヒラリと車を下り我は跡より歩むべし此車にと勸むれど甚六氏また辭退して推譲果しなし年長の車夫一奇策を献じて曰く車のある處まで誰君かち小さい輕い方が合乘をなすツて下さると宜うござりますと少しばかりならさしづめ我輩なれど輕い方は他に幾許もあり千鈞の弩は騾鼠の爲に發せずと口にしながら毎夜五百斤づゝも体量減しに辛苦する軟派連フハ〜としてあれば輕いも荷物を二つ重ねるがよしと我は知らぬ顔ついにまた車夫の見立にて三太郎氏猿松氏の膝へ重なりてユイツは異だア、重い痛いぞ切ない〜、アハ、よく似合た格好だ、と祭禮の山車のやうに興じて引出す、

雨一しきり雲はますます〜凄し生駒の嶽の頂を半呑みて今にも我々が上に黒き手を下さんとす風さ〜其勢ひにおそれてか水田溜池にわづかに形を見せて音はなく地に這ふて寒く吹く、鳥も飛ばす蛙も聲を止め、木草までが其襲來るをのがれんと心構へしであるに似たり、濕氣ある平坦の道ゆる車輪にも音なく人も咳せず、彼の黒みたる處が上野でござります最う一里ばかりと車夫が安心するときバラ〜と來たりしが此雨勢ひのみ示してなか〜持重なり上野に掛るところより却つて西の方晴てシト〜降となりぬ三太郎氏の車も出來て一行は勢ひ出し雨と云ても例の通り上から降るので有らうア、上野が最う四五里先で一番拔

ける程大夕立があれば能いと大聲なり

(九)

伊賀の上野は荒木又右衛門の手柄話に聞馴染たる處なり且つ芭蕉翁の生地として古跡もあれば此は丁寧に見物せんと思ひしも「なか／＼濡る／＼春雨の袖」宿に着けばはや夕暮友忠といふ宿がよしと人の詞を的にして車を其處に着けさせしに一行より先に此に宿をしむる人ありアラおほけなや其人は三重縣の書記官といふやんどなき方ざまなりけりどなん後にぞ傳へうけたまはる、トコロが變挺なる中に一際目立軟派の統領字は振作號は思軒氏コレヨ能い座敷は有るかど山谷橋から供にはぐれた頼兼よ

り鷹揚に立入りしなれば家の者は化轉して只へい／＼と云ふばかり泊れでもなく出て行けでもなく痒くはある痛み入るといふ様子、氣の毒にもあり可笑もあり困却でもあり恐悦でもあり此方も勝手がわからなくなる中には餘り歓迎過ると焦立もありしが兎も角も此は誠に事情酌量すべき條あれば猿松氏が説によりて八百新といふに投宿す、此の押着に手間どりて風呂に入れば夜に入るといふ手續き鹿の肉を求め半里餘もある新平民の處へ車夫を走らすれば今日はち生憎といふわけ酒は最とよいのが有るかといへば是ばかりブランドの能いのと金を持たせてやれば雨で何處も店をべめましたといふわけ譯をよく／＼聞いて

見れば皆尤もなる譚なればさすが鬼神も横道なくおどなしく食事を終り太郎作東四郎拔作鈍四郎の四氏は時しも此處に興行の夜芝居を見物に兵六甚六三太郎猿松の四氏は古池やに因ある眼玉に灸をすゑた蛙の乾たるも有りもやとソボ降る雨も厭はず出づ。余は此にして始めて聊か間を得たり溜りくし睡より先づ心覺えの日記だけでもと筆を取りしが紙にボタ／＼筆をつけるのみ心は夢とはやたどれば江戸と大阪への手紙認めしのみ衾を被がんとする所へ常には似ずいと無事に四人は芝居に降参して歸り掘出に行きし三太郎氏も晝のうち涼車中で翫弄にして毀したる共同時計を直さんと早くもどりて。伊賀の上野か……成程伊

賀の上野だと自問自答しながら蒲團の上にて熱心なる機械師となる、千鳥形の香爐を襪襦をかぶせて十錢銀貨二個にて掘出たる兵六氏紙燭を燃して怪しき洞穴を窺ひし甚六氏など皆得々として歸り來たる。得意は得意、失意は失意、只喃喃と自語するのみ。酒の悪かりしたため本然の善にかへるの聲々更て晴たる月影清く九人揃ふて旅枕に頭をつけて寐たりけり。明くれば今日こそ窓の影ならねどさす月の瀬に着くなれ一行いつよりも清々しく早くに支度を整へて東四郎三太郎の兩氏まだきの空の暗雲と出る鈍太郎氏の脚半草鞋ばき見るだけでも勇ましく初めて旅の心地ぞするイデ其時の名乗ならねど時鳥一聲せん空の景色い

と勇まし甚六氏と太郎作氏は三里も山と聞てはと用心の爲に車を三輛曳かせたり我は拔作猿松鈍太郎甚六の四氏と共に藪鷲の聲を拍子に話ものして野道を行く、四方の山々景色など云知らず面白し。歩の息のやゝ忙しくなるころ草臥忘れにとて猿松氏自ら井上の何某に擬する能辯を油を添へたる走馬燈の如く縦横無敵に振り廻す皆々面白きに足の運の方角も忘れて「ウ、夫から」と進む跡よりオ、イ、と叫ぶ聲あり振かへれば彼の豫備車夫にて旦那方途方もない一里も道が遠つた、是を行くと名張越です

(十)

何處で間違へたらう今までのうちに別に振分の道はなかつたがと不審つても跡の祭是だけが損ばかりでなく月の瀬道へ出るには十町もあるといふにクンナリと草臥を覺え是も猿松氏の話に浮かされた故なれば道へ出るまでまた一くさり珍談を望めば足より口が草臥たりとて元氣なし、車夫も道なき山畑を無法に突切るなれば方角を的だけに先に立つ、十町餘も歩みて向を遙に見れば黒の山高帽子黒紋附の羽織バツチ駒下駄がけで人力車を曳く異形の者あり、目を定めてよく見れば東四郎氏なり是は我々を追來し車夫の車を捨て置かれず御苦勞にも引かれしなり。アハ、車では時々妙な事が始まると一同打揃ひて一笑し



是より道の景色もよければ齋藤拙堂の月瀬紀勝に上野を出て一里許で最う梅が有り始めるとあつたから此處らでヒヨツクリお目に掛り始めるだらう此一曲り彼林を越したらばなど咽喉を渴かし鼻をヒコつかせて行けど、梅はなし左れど衣裳を飾りし女連または筒持たせし遊山の人も折々あり何となく一行も花見の心になりて春めきぬ。白樫を過ぎて石打といふ小村の茶店に憩ひて是からが梅の場所ゴザイといふ掛聲に予は氣も勇みて魁に飛び出す山の腰を巡りく、景色はいとよけれど梅は更になし、予は廣い道を獨行くに跡は續かず顧みれば一行は二三丁後より横の小道へ切れて行く南無三寶また道を違へたかと哇

を傳つて先なが後になりて行く道は爪先上りにて左右茶畑多し今年に寒氣の爲に發芽甚だ悪く半年の半分も取上らぬのみか枯るもまた少からじと畑の人愚痴を交せて語る十五丁も行きて小高き丘によき松あり此下に休みて伊賀大和の山々を眺めて其の高下を比較し山はまた人に移りて各自の批判各自の辯護に息を切る此に至つて予が常に腰を離さぬ水の壘役に立ちて大に賞賛を蒙ふる。一息して此の丘より真下りに長き坂を曲りながら下るに三太郎兵六鈍太郎の三氏兎の如く跳りて我々はまた坂の半にも至らぬうら早や向ふの坂へ上り切て悠然たりオヤ坂の上から向ふまで飛んだのではないかと褒めたのが聞えてか圖に乗

つて早くまた十五六町上り下りしてヤア絶景真に奇絶だと始め  
 て梅を見て叫びしは兵六氏にて其處へ驅付れば成ほで見下すか  
 ぎり梅にしてしかも眞盛りなれば只白雲の谷より上る如くなり  
 それよりは何處も此處も梅にして天神の社に上れば躑躅川の流  
 青し兩岸の絶壁山麓梅ならざる處もなし唐繪に似たる風景、よ  
 し梅あらずとも一遊の價値あり奇絶妙絶などあらん限りの褒詞  
 を並べ草を敷き傘を杖にし或は俯して溪を覗き込み或は手をか  
 ざして山の頂を見る歎賞山も動くばかりドツカリ腰を落ち付け  
 しが此より先にまだよき處ありと云へば今満腹しては後の膳に  
 箸が取れまじと殘惜ながら立つ、天神山より下り皆梅なり谷間

々々が皆一目千本、盛りは過て香世界とは云れぬと散りまがふ  
 は雪に似たり。梅見の客は近郷近在の者臭く随分雜沓する中に  
 も躑躅川の清流に舟を浮かべてド、一カツボレヂヤカ〜騒ぐ  
 風流連もあり、勝地多くは俗客の厄に逢ふと云ては見たもの、  
 梅の目から見れば此方も放れた中ではあるまじ。

(十一)

月の瀬の梅の香を世間にもらせしは田宮仲宣の東牖子といふ隨  
 筆ぞはじめなるべし其書は享和元年の出版なれば今より九十七  
 年前なり其後天保四年に伊勢の人小津桂窓此地に遊びて梅櫻日  
 記をものしたれど同好の寫し傳ふるのみにて版本にならねば多

人ひとに知しられず 齋藤拙堂さいとうせつたうの月瀬紀勝つきせいきしやうより梅見うめみにとて人ひともわざ  
 く此地このちに遊あそぶ事こととはなりぬ。梅うめなくば山間さんかんの一僻地へきちわづかに  
 伊賀いがより大和やまとへ通かよふ間道かんちやうなるを花はなさへ實みさへなりはひの爲ためにつ  
 くりし梅うめゆゑに鐵てつの釣橋つりばしがかゝる繁昌はんじやう、世中よなかこそりて風流ふうりゆうがり  
 通つうがり意氣いきがり高慢かうまんがり、其處そこや此處こゝでは遊あそび足たらず温泉海水浴おんせんかゐすゐよく  
 の其外そのほかにも鷄はとりが虫むしを拂はらふやうに砂すなをあひるの海氣かゐきを呼吸こゝろするの  
 霞かすみを呑のむの馬うまを吹ふき出すの豆まめと徳利とくりを投げ分わかけるのと錢ぜにもない  
 くせに熱あつばかり高く借金しやくきんをして花奢はなしやがるのみか他の賽錢さいせんで鰐口わにぐち  
 を叩たたき神かみも佛ほとけも欺たぶし徳とく、鼻はなを突つくまでは強つよく出でて世間せかんを飾かざる、  
 それが中なかなる一看板雅ひとかんげんの字じを金きんで光ひからせんと遊山場ゆうさんばを皿眼さらまなこで探さぐ

中なかゆゑ是非せつひ月の瀬せを見みずんばあるべからず山陽さんやうもこれを見みな  
 ければ梅うめの事ことについて口くちを開ひらくなど云いたくらみだからと人ひとぞめ  
 ききの群集雜踏ぐんじゆざつたよとうく土地とちの人ひとを利口りこうにして藝妓げいしやが三人出張さんにしゆつちやう  
 するまでにはしたりけり。花はなになり行く人心ひとこゝろ、風かぜの誘さそはゞ如何いか  
 にどかする、梅うめはもと實みを取とる爲ために植うえなれば樹きは若わかきが多おほし  
 また花はなも常つねよりは少ちさく皆みな一種しゆなり香かほはまことに薄うすし盛過さかぎた  
 るほどなれば香かほはぬにやと疑うたがひて或人あるひとに尋ねたづねしに是こゝは烏梅うばいとて  
 焼やきて藥くすりになる眞まの山梅さんばいなれば香かほは始はじより薄うすしといへり、多おほく  
 ありてよきにて一木ひときづゝはなしては見所みどころなき梅うめなり。川かはは名張なばり  
 川かはの末すえなるが兩岸りやうがんに杜鵑花さつぎ多おほきゆゑ躑躅川さつぎがはと名なづくるなり花はなの

頃梅に劣らぬ眺ありといふ。道は上野より入れれば白樫長野谷石打などいふ村を過ぎ尾山村といふに到れば即ち其處がはや月の瀬なり上野より三里に遠く四里には近し道もよきが上に石打より新道出来て山に上らず名張川の岸に沿ふて景もよしといふ我々は月瀬紀勝を指南車として頻に通がりし爲め車夫に欺されて山へ追ひ上られたり併し何方にしても其差はわづかなり。一行が休らひて自身自評せし一叢の丘は後に聞けば其處伊賀と大和の國界なりしとぞ又山より谷を覗きて見し處は覗き窪といふ處と自然と名所にあひしも可笑し尾山より長引村にいたる崖を下れば鶯の瀧といふあり此道最も梅多く只白雲の中を行く心地

す此鶯の瀧のもとに白き馬をつなぎ手して其瀧を掬ひ飲む若人あり面貌清く洋服の着こなしも都めきて此人こそ此梅を見る人なれど人も見かへり打興に來たる村嬢達もからげを下して打ひそめて前を過ぐ我も何處の人ぞと問まほしかりし。岸に下りれば渡舟あり流が急なれば棹にて真直に向岸へ着けがたきゆゑ大綱を張り渡して一人は其綱にすがり一人は棹をさして船を行る其さま誠に趣あり(下流にある桃が野の渡舟も此如く向ふより此方へ綱を張りて渡す)船にて兩岸を見たる繪にも寫されまじくまして我筆に書取らんことは及びもなし渡しを果て向ふ山に上る此等小名はいろくあれど打まかせて月の瀬といふ處

なり巡り上る阪も畑も皆梅にて松杉などが珍しと眼に入るほどなり

(十一)

グタリ／＼と山を下上するなれば景はよけれど草臥はまた甚だしく拔作氏などは吁浮世ぢやナアさへ唸き出ぬほどになられたり。それを指したる宿屋に着けば客充滿て椽端に腰かくるほどの餘地もなしまた一登り上の宿を聞けばそれも御生憎また下りてかぢ屋といふを掛合たれど今日は知事様か書記官様がお着になるといふ先觸の有る外に學校生徒二百人を泊てあれば如何いたす事も出来ませぬといふ兎も角もお着になるといふだけの事

なら其お着になるまでの間置て呉れ空腹と草臥に腰もくの字になつたればと拜む様にして二階に上て貰ひドタバタワヤ／＼の中にて晝食す。食物は不味なれど酒は案外によし酔ては一同氣が強く此は茶代の光をからんと氣前を見せて借主を説くに主大に解りよく六疊二間でよろしく能い座敷をお貸し申しませう折角の御出ち泊申さぬも残念でござればとの立引。左様事が極つたら腰を据て遊ぶべしと割籠竹筒の支度させてまた山を下りて渡船場へ出で遊山舟を雇ふて川より左右の山の梅を見る船頭なかく通人にて月瀬紀勝などは立下しに覺え居て酒の合も話の合もするはよけれど「如何でござります、御遊山ならば猫

を一定お入れなすつては」と怪しい茶屋か待合の女中並なるに  
 は一行顔を見合せたり此一語にて月の瀬といふ所が幾許賑やか  
 を察すべし、小津桂窓の遊びしは天保四年にて今年より六十一  
 年前千支さへ同じ癸巳其時は稀疎に農家のあるのみにて人宿す  
 家はなく二里ほど踏み入りて大橋村のいと汚き商人宿に辛じて  
 泊りしよし記せりまた梅見の人のいと少なかりしは左にて知ら  
 る

上略 斯ばかり梅の木立多くまたどころのさまもよのつねな  
 らねど見に来る人はさばかりに多からずやうく五人六人あ  
 へるばかりなり

盛にも群つゝ人の見に来ねば花のどかなる月が瀬の梅  
 うかべ飲む人も見えねば名のみなるさかつきがせの梅にこ  
 そあれ  
 色香知る我とや梅のおもふらん見に来る人のあまた見えね  
 ば

などあり今は左ながら縁日の夜店ほど山道を入押合ひ酔しれた  
 るが唄ひ酔狂ひが道を妨げ江戸の飛鳥山向島の花の盛りもをさ  
 く劣らず。梅は櫻とちがひ幽に唐めきたるところに趣はある  
 なるに山中に塵を揚げての騒ぎは古けれども花々迷惑などいふ  
 べからんか。斯くて船は上流に棹さして花見の騒ぎを山がくれ

の響ひびきに聞くほどになりて岩の間へ繋つなぎ東坡子とうはしチト朝あさのうち替けい古こに來玉きたたまへといふ面色おもていろをして一行いっかう快くわいく酌しやくむ宿しゆくの子こと船人ふねびとの子岸こぎしへ下り立くだちて枯枝かれえだ枯木かれきを集あつめそれへ火ひをかけて笹折さしをりまたは古板ふるいたに乗のせて川かはに流ながす川風かはかぜに燃盛もえさかりながら下しもへ流ながれ行くさま鵜舟うぶねの簞かざりより勇いさましく赤壁せきへきの火攻やきうちと手てを拍うちて褒ほむれば今度こんどは大供おほきも岸ぎしへ飛下とびおりて大仕掛おほじかけの焼討やきうちをはじめ笑嗷山せうがうやまを揺ゆかすばかり御詠おあつらへの月黄昏つきくわうこんといふ頃ころに舟ふねをかへして渡船場わたしほより上あがりまた新あたららしく梅つめを賞しやうして宿やどへ歸かへり六疊二間に九人はんにんがゴタ／＼と陣取ちんぎりて酌しやくかへす其様そのさま「夜着よぎ一つ祈いのり出しけり」の跡あとを「梅うめの宿やど」とも替かへまほしき程ほどなり一行枕いっかうまくらせぬ先まづに頭あたまを痛いためて氣遣きづかふ

(十二)

一友人ひとりたちの曰いはは或處あるところに旅寐たびねの夜具やぐの鹿末ろまつなりしゆゑ今少いますこしよきを持もち來きたれと怒いかりしに女主おんしの出いでて御覽ごらんの如ごとくお泊とまりの多おほくて何事なにごとも手廻てまはり兼かねそろ夜具やぐも御家ごうちにお休やすみと思召おぼしめして御不肖ごふせうなされてと詫わがしには腹立はらたしくも可笑をかしくて其まゝに止やみたりと、今宵こよひも其話そのはなしの如ごとく御家ごうちに御臥ごふの覺悟かくごをせねばなるまじなど云いふ所ところへ運はこび來きたりしは絹蒲團きぬふとんのしかも仕立したてたるばかりなるには一同案外いっとうあんぐわいと悦よろこびしが六疊二間に旅荷物取擴たびにもつとりひろげ其外そのほかに火鉢ひばちも行燈あんどうもある事ことなれば九人別々はんにんべつべつに床とこは敷しかれず一の夜具ひとつやぐに二人三人潜ひんもぐり込み押おし合あへし合あふ有様ありさまは箆ざるの中の泥鰯なかにの如ごとく斯かる時ときにはチト軟派なんぱの軟派なんぱ

たる所を現して夜の梅でも見に行けかしと思へどさすが月の瀬の山の中此を越ゆべき勇氣なきにや騒ぎを隣室に譲りて睡につきし様子なり、隣室の學校連は昔戦の假陣屋といふほどの騒がしさこれが月の瀬の梅見かと思涙に咽ぶばかりなる所へまたバタ／＼の響ありて我室の障子を開くるはまた座敷違の酔漢かど驚くと是は東京より一行の跡を追ふて學齡館主が來りしにて名々に要用の届物ありとの事に一同首をあげてイヨ御苦勞様待て居ましたなどの褒詞ありて枕を些ばかり高くしたり、翌朝は駕籠と奢りて立出しが朝の梅はまた一際見榮あり月の瀬より川下桃が野の梅はまた多くして景色もよし殊に駕籠の作りも丁寧に

昇き方も思ひの外に足並よし斯くて行々一里餘り來たりし切通しの山腹に「與太郎こゝにて死す」「拔作こゝにてたふる」或ひはこれは與太郎の頭なりなど杖の先きにて大きく彫りてありハテナ與太郎ハテ拔作聞いたやうな名だが併かし此處らでも此様な名が流行かど駕をとめさせて不審の眉を擡めしが龐涓を討取る孫子の謀計でもあるまいと其のまゝ行き過しが實は駕籠は拔作氏一人が笠置まで通し餘は一挺を半途づゝ乗る約束にて其の前後はヂヤン拳にて極たるなるが予は例の如く勝ちて前を乗りしなり左れば負けて出がけを歩く連中は兵六三太郎甚六太郎作猿松の諸氏なり駕は先に出でしかも早ければ餘ほど負拳連中は



後ならんと思ひしに舊道の險阻をヤケに押されて駈通り駕より先へ抜けて此に鬱憤晴しのイタヅラをせしこと後にぞ知られける。半分道のところに待受て此に一同一休みしたり此より此の乗心の能い駕を取られブラリくと歩くうち一雨バラつくに狼狽を極めてア、駕を通しにすればよかつたと後悔の中柳生といふ淋しい驛に着く此處より笠置の案内々々とうるさしかゝる山間の地にありながら車夫の人氣至つて悪し三太郎氏は沓摺の痛にいつもの勇氣なし予も弱りの方へ突合て柳生より車に乗りしが果して車夫の畏にかゝりて魔窟ともいふべき汚ない宿屋へ引こまれたり左れど蜂は蜘蛛の巣にかゝらず予大に智恵をめぐらし

辛々其網を破りて出しが夫がためさして望の笠置の古跡を探らざりしは憾なりしが拔作氏の骨折にて木津川を渡して木屋勘といふ能い宿にて晝の支度をなし木津川を船にて下り午後四時頃に木津に上り直に車にて奈良に着き一同無事の小祝宴を開き予と東四郎氏は其夜の汽車にて大阪へ着しぬ。先月の瀬の梅も見て是れから大びらに梅通なる事を得るは目出度たしく

(二十六年四月)

二 日 の 旅

(一)

可愛い子には旅をさせよ、旅は憂ひもの辛いものなど云しは昔にて今は汽車あり汽船あり馬車ありまた人力車あり手拭提げて駒下駄がけ伊勢参宮も松島見物も金さへあればなる世の中便利に過ぎてオツならずあはれ古への如く旅といふ詞には草枕といふ冠辭をつけ杜若の歌を讀んで乾飯の上に涙を落させて見たし不自由がしたや憂ひ辛い目に出會ふて見たやと金を持あぐみ便利自由に飽果たる殿様坊ちやん若旦那隠虚陽虚の六大通朝靄深き五月七日根岸なる我古巢に會合しいざや昔の旅をせん憂辛い

目に出會んとさながら武者修行が山賊妖怪を退治するといふ意氣込それゆゑにや身形も山神の祠に晝寝し荒原に野宿せんばかりに勇まし、偕斯く勇ましくもまたと大薩摩はあつても振り落して何處の山の書割になるかまた肝腎の行先が定まらず又始まつたぜ極り切て居るぜ誰か此中に一人ぐらゐ行先を知て居さうなものだと六人等しく呟いたところて先から其處までの相談はせず「宜しい心得た」と例の早合點の鉢合せなればナンボ豪傑揃ひでも當なしには飛出せぬと足の力も少し抜け急に地圖を取出して分別らしい顔で六人の評定幸堂得知氏發言して眞間鴻の臺より市川八幡の船橋泊りはどうであらう第一船橋は魚が新しい

橋際の立場茶屋は能い松魚が有るよと遠目鏡で見たやうな話し  
 流石は老功感心々々と異議なく決して先づ向島までは道は確な  
 り一行の形を見て吠るとは根岸の犬もまだ通でないと同得々  
 として立出しが他観はいかに可笑かりけん

一 二日の路用各々金一圓を會計係へ差出し其他決して一錢  
 たりとも隠し持べからざる事

一 時計並に金指環すべてめかし飾りかたく禁制入歯といへ  
 ど金は相成らず候事

一 車に乗るべからず馬籠とも無用のこと

斯く三章の法を定め會計係りは只好氏そが助役として太華山人

選まれたり根岸を抜け千束稻荷の前より田甫を横切り日本堤へ  
 上りしまではよければ此序に柴又の帝釋天へ参り近ごろしきり  
 に物凄き噂あれば女難除の守札をば頂かんと一同が云出して柴  
 又へは竹屋を乗らんか橋場を渡らんかとまた一評議つひに橋場  
 に杖の先が向きて田中へ下り山谷より淺茅が原へかゝるころ早  
 くも只好氏草鞋の横を踏み切りて足付悪し一人前一圓の路費い  
 さゝかも冗に用ひがたしまだ半道も踏み出さぬに一錢五厘草鞋  
 と帳面へ付くやうでは行先團子も喰れまじと一同の痛心一方な  
 らず太華氏旅通がりて懇に穿きやうを教へ渡船場手前にて草鞋  
 をもどめ船中の徒然にゆるくと講釋付で穿くことにしたり渡

船は大入にて立も身軀を細長くするほどなり此乗合中赤ら顔を  
 無暗に擦りて鼻の頭を光らせたる濁聲の男あり此膝にアラ怖い  
 よとしがみ付きたる藤色に薄鼠紺屋の染帳へ一種添足の手敷を  
 かけたらんと思ふ顕微鏡的紋付の羽織を着た者あり此の介添御  
 取持としてかまた二人嬋妍といふべきならねどジャンケン藤八  
 などで御座敷を怪しくつとむべき軀の女ありいかに川中とて乗  
 合もあるにオツベケベとかいふ卑陋きはまるものを唄ひわめき  
 折角の思軒氏の洒落を横取して我物顔に笑ひ興ずあな恐し早く  
 此に女難の見せしめありけりと一行いよ／＼信心を起しぬ

(二)

諸六人の可愛子達櫻の若葉はまた妙と隅田堤へは上りしが此か  
 ら何う行くか先は知らず何でも堤を下りて向ふへ入れれば能いと  
 細道へ入り行ども／＼四木の道らしきに出ず雨上りの畦道中下  
 駄の齒を踏み込み一足抜のいと重し予思はず歎聲を發し難所々  
 々斯吸付かれては堪らぬと云ば南翠翁聞咎めナニ女難々々斯う  
 吸付かれては堪らぬとナ貴公昔より聖人と同業の通達に野暮が  
 られてそれを得意と誇りながら今になりて何故花やぎたる事は  
 云ふぞと談じたり予嘲らつて曰くアミや生アミと賣り來るを念  
 佛者が聞て袂より珠敷を取出しました書寫の性空上人。イ、サ分  
 かつた。信心がらの聞やうで君の耳には左様聞えるのだらうダ

カラ世の中物騒なのだと言ふうち皆々あとへ引かへすは道が違つたと聞いて心づけばなり予と思軒氏は先へ歩みしゆる斯う引かへさるゝ時には殿となりて氣が利かず苦情を並べながら皆々の行く方につけば今度は全くの畦道にていよく下駄連難儀なり大かた此道も間違ひだらう今度引かへすとき先になるやうに此に居やうと道の違ひに馴て横着にも思軒太華の兩氏と予は畦へかゝみて蓮華草の花などむしりながら他の人の爲る様を見てあれば得知只好の兩氏は草鞋だけにブシク畦を物どもせず全で蒲團の上を歩くやうで能い氣持だと洒落ながら飛ぶが如くとは行かねどよろけくも早足に一丁餘り行きしが追々畦道の悪き

に降参してや苗代つくる老女を呼びかけ柴又の方へは何う行きますと問へば老女は此怪しげなる修行者と節季候を見て案山子の化物と驚きけん頼には詞もなかりしが其後に築地の隠居の人間に近き出立にて居るを見て纒に心を安んじてや「お前さん方は何處からお出なすツたのだ」と問かけたり此方より道を聞けば却つて向ふより何處より此へは來たりしと反問するに道にはあらぬ道に迷ひ込みしこともまた此三人の出立の異様なるも推すべし左れども得知の翁なかくの瘦我慢なればまた違つたと後へは返られぬと此に待つ我々には聴取れぬやうに一二語云へば老女は「仕方が有りません子エ」と云ながらも拜むやうに頼ま

れて立引氣を出せしと見て諄々と込み入た道を教へるやうなり  
 我々三人は此躰を見てとても此よりは進みがたし先づ一たびも  
 どの堤へ上り振り出し直して本道を行かんと三人には引別れて  
 もとへ戻りて道を問へばたゞ四五間先によき下り場あり小川に  
 沿ふて風雅な道なり此なりく予十四五より廿歳までの間に家  
 兄に伴はれて四五度成田の不動へ參詣しぬ今もかすかに此道に  
 覚えありと安心して見れば腹も減るに大華氏情ありて鹽煎餅を  
 買て與へられたり日は照るに歩みて躰熱は起す煎餅はかぢる咽  
 は瓦の如くなれど此上休みて茶代までは支出されずと會計方の  
 難面に思軒氏もどもに弱り果て然らば是非なし何處ぞ井戸の水

を貰ひて濕さん清き流あらば掬ひて飲んど心がけて行く向ふの  
 小橋の袂に待つ人あり思軒氏を見かけて且那樣お待申しました  
 といふ是即ち同氏の車夫にて氏が忘れたる笠と杖と握飯とを持  
 ちて此處まで追ひ來たりしなり偕も危なし先にあの無法道にか  
 いらば此にて此人には出會まじよくも立戻りて此本道へは來た  
 りし事よど我々も思軒氏と共に車夫を勞らひ握飯の包と杖笠を  
 受取りぬ車夫は別を告げて立去らんとするを思軒氏呼び止め斯  
 して無事で道中をして居ると奥によく傳へて呉れよと少し濕ほ  
 く云るゝも旅となれば互の想無理ならぬことなり可憐なること  
 なり

(三)

兵糧を得て大にいきり出し、能い道だ氣も伸々と能い景色だ  
 さぞ三人は田の畔で泣いて居やうそれがと云ふに平生精進が悪  
 いからだ僕等はまた天祐がある此で車夫に逢ふは不思議だ三人  
 が彼方此方狐に魅まれたやうに畦に迷つて居る姿が見たいなど  
 噂して來る四木の川べりの茶店にはや三人は待て居てどうした  
 狐に化されたのか今まで何をして居たさぞ草臥たらうマア異だ  
 から此稻荷ずしをやつて見玉へ憫然に空腹さうな顔だと反對に  
 弄られて無念やる方なければどもまた意趣を返す節もあらんと此  
 は素人に花を持たせ思軒氏賜物の握飯に茶店の出花を褒めて心

も腹もたしかになりて薄眠ながら立出たり。此の茶屋まことに  
 よし

青々と伸立たる真菰の根を揺かして小鮎の游泳するまで見ゆる  
 流をへだて、蓮華蒲公英など畦に咲満ち空豆の花の香吹きおく  
 る風にまだ羽よわき蜻蛉のゆらめくやうに飛ぶなど取あつめて  
 面白き野邊見わたす先は麥の穂の波若葉の林たゞ一の鷺の行方  
 の消ゆるまで褒めて足も輕し口もまた元氣よきにつれて輕く思  
 軒氏扇つかひしながら咳きて一の耳新しき話を説き出されぬ思  
 軒氏嘗て晝寝といふ一話を泰西名家の文中より抄譯されしが其  
 中に「福の中の最上の福なる一條の艶福」の一句あり予には用な

けれども如何してか物忘れの性分なるにも拘はらず記憶してありしが端なくも今この艶福の解釋を實跡に徴して細やかに語り出されたり跡になりまた先になり狭き道を歩むなれば予に向ひて話さるゝならねどはつれ／＼聞くに艶福といふ福分を天に還しいれたる予なれども聊か羨ましと思ふ念も萌すほどの珍話なれば餘の人皆な節を拍ち聲を合して喝采するに思軒氏ます／＼氣を得て其餘まのあたりに見るごとく語る只好氏此一行中にて予についで年若なれば一言一句ごとく興に入り「夫から」「フム成程」「畜生め」「夫から後は」「ソコデ何と云ました予」などいかにも話人を促して話の續きからを引立せる聞上手に一行い

よく笑盡に入り足は何をして居るやら忘れしうちに立石に着き皆な一度に「大層早かつた」と云ひしも可笑しこゝは中川の岸の堤にてよき茶屋三四軒あり流れに臨みて眺望よし此にて晝食にせられてはと願ひたれど會計の只好氏なか／＼聞ずまだ早い最少しで柴又へ行て面白い物を喰せる甘い續きの今の話しの其跡はと思軒氏に縋るやうに歩みて言もしどろなり堤より轉がり落てはと心配の跡より帯を押へぬばかりにして居るうち先づ艶福談一區切付き後譚は今宵の泊りにて幸堂氏かはりて話す事になりヤレ／＼安心したといふうち早くも曲金の渡し場に着く此川筋すべて景色よし渡しも今一がへりしたしと思ふほどにて急



がぬ船の岸に着けば上り見るに鯉釣の人の長閑やかなる雲雀の  
 聲の麗かなる我息さへも緩かになりぬ堤三四丁ばかりにて曲る  
 道あり其處より草刈の乙女手拭に日やけを厭ふて五六人堤へ上  
 り來る只好氏近づきよりて柴又へはと優しげに問へど柄になき  
 事なれば娘達は驚きて返事もせず幸堂氏かはりて京阪を驚かせ  
 し腕を見せんと進みよりオイ姉さん柴又へはどう行くよとまだ  
 云切らぬうち乙女達はキヤツと叫び笑ひくづれて堤を斜に驅上  
 りて逃げ失せたり。逃ぐるも無理はなかりけり

(四)

右の手に劔を持ち左の手を開き眞黒に忿つた怖い尊容も御利益

があるといへば怖くなく有難く思ふ人情慾より怖いものはなし  
 柴又村經榮山題經寺の本尊帝釋天王人愛を得玉ひて堂宇立派  
 參詣群聚す一行六人元より信心者なれば本堂の前に進み恭々し  
 くぬかづきて會計掛の只好氏に賽錢一錢の支出を乞ふ只好氏一  
 錢銅貨を抛ちて是は五人の分でございます私しは此通り別に一  
 錢差上ますと銅貨を本尊に見えるやうにさし上げて箱へ投げ入  
 れしは白い紙へ記名して是見よがしに投票する人の手妻にも似  
 たり予袖を引ききてすでに賽錢を上げれば別に君が奮發するに  
 も及ぶまじきにと云へば否々揉込では利が悪く此一錢だけは僕  
 が別途に支拂ふよと答へて特別一人前だけ念入に拜まれしは何

の願ありてか可笑し境内に御神水とてよき水あり咽は乾く腹は  
 空く柄杓のあくをまだるがりて皆飲む此晝食と定めたるどころ  
 なれば大に樂みにせしによき茶屋の前へ來ても入らずモシ晝は  
 何處でと促せば承知だよい家が風雅で見晴しの能い所があると  
 境内を出で門前の一軒屋へ入りぬ此家茶屋には相違なきも他の  
 賑はしきに似ず少し不平なれど出納の權我になければオメく  
 と後に従ふ椀盛甘煮とせう鍋三種に外に太華山人が携へたる珍  
 味ありて酒飯畢ると云へば人聞よけれども實を明かせば會計  
 兩氏の發明にてテレコ献立といふものにしたるなり觀客左るさ  
 もしき情なき發明を知り玉ふまじければ此に説明申すべしテレ

コとは芝居道の通言にて二の狂言を揉込に演る事にて即ち此に  
 て六人の中へ甘煮と鍋を三人前づゝしか取らずそれを六人で兩  
 方へ箸を入れるにて是を名づけてテレコ誂へといふなりと苦し  
 い發明もあつたものなり併し此誂へ方至極妙にてテレコにして  
 すら六人の豪傑が三分の一は退治ず憐れや思軒氏は酒ばかりに  
 て凌がれたり始聞たる時には情なく思ひしが後にて思へば名案  
 なり看客諸君三四人以上の連にて其場合によりては此法を用ひ  
 試み玉へ。扱兎も角も此にて腹はたしかになりたり真間までの  
 道を問へばわづかに半道船橋までにしても三里に足らずといへ  
 ばナンノ造作もなし一里一時間として三時頃には着くチト御着

が早いな杯と飛び出して矢切の渡しの方へ向ひしが日中なり酒  
 氣はあり皆少し道に飽みやゝともすれば置去にされぬやうに詞  
 を設けて立やすらふ中にも矢切の堤にて渡船場を聞くだけのわ  
 づかの間に思軒氏道しるべの石に腰かけ竹の杖を力にクダリ  
 と休まれし躰菅笠にフラチルの單衣を肌脱て腰に挟み時代の付  
 たるメリヤスのシャツと股引といふ奇なる服装知得翁見て此人  
 のこと悉しく二編にわかると書入の有る處だと評されしは草双  
 紙通とて穿ち得て妙なり。矢切の渡しとは大利根の流れにて市  
 川の上なり真間鴻の臺翠深く見渡され此頃の雨に水増して田も  
 また湖水の如く渺々として景色云ん方なくよし渡船場際に静に

廣き庭園あり離の座敷は江戸川に臨み藤の花も盛なりよき家か  
 な料理屋と見えるに此は何と云ふと船頭に問へば棹さす男一行  
 をゾラリと見て「君たちこれを知らないのか」と左も輕蔑したる  
 調子にて答へたり

## (五)

求めて不自由が仕て見たいといふ連中なれば今斯く渡守に安が  
 られて一同嬉しさをたまらずア、知らないよと例よりまた問伸に  
 云へば船頭得意になり是れは川甚と云て立派な料理屋サ東京の  
 功者な人は皆此へ來ると教へ顔には云しものゝ紅は園生に植ゑ  
 て隠れなし窺せど色香うさん臭しと思ひてか其後は何を問かけ

ても笑つて答へず前のテレコ晝食の時にも茶屋の女房不審さう  
 一行に目をそそぎ貴君方は東京で入ッしやいますかど問じと  
 き誰やら透さすイヤ埼玉縣だと答へしにオヤ夫では斯して方々  
 御参詣でございますかと云れしときも一同悦喜せしがこれよく  
 思へば卑下慢といふ一種の慢心悟つた顔が迷の頂上なるべし。  
 此川甚といふ家はいかにも趣きあり近日服装を改め元の小栗の  
 判官となりて一遊すべし實に君たちは知らないかどはよく云た  
 り通がりながら一行六人知らぬといふは迂遠々々と我を折りて  
 船より上れば景色更によし新に築たる如き柔かき堤に若草生茂  
 り入江の水は雲の影をうかべて澄み葎雀の聲また聒しからず水

に浸されし田に子供の泳居るを見ては衣服を脱ぎて我も飛び込  
 みたくなりぬ此堤の上左右とも枸杞のみ茂れり一人の男投網を  
 傍らへ置きながら無性に枸杞を刈倒すゆゑ立止まりて此枸杞を  
 何にするのですと問へばナニ何にもするでない堤の掃除に刈る  
 のだと無造作なり枸杞茶を製すとも枸杞飯と洒落るもよからん  
 に徒刈倒すは惜しいものと思へど田舎人はそれらに心を止めぬ  
 と見えたり得知氏その網は何に志なさると問へば今朝此の田に  
 鯉が居たから打たうと思つて網を取に歸つたが其間に何處へか  
 知れなくなつた今にまた見付けたらと云かけて跡は云ずまた鎌  
 の手を止めず見されぬ程に漫々たる水田一尾の鯉を籠へでも入

れて置くやうに思ふも心長閑の故なるべし羨ましき境界なるか  
 な堤は屈曲して利根川の帆掛船を左りに右に見てさながら大湖  
 の中の築島を行く心地す半ぶろに一叢茂りし處あり此下蔭に皆  
 涼風を入れながら全躰久保田米僊氏此行に入る筈なりしが横須  
 賀に招かれて今日の人數に加はず米僊氏あらば此を寫さずば  
 動かれぬ所ならん豫て話を繪にかいて貰ひ此行の繪巻物を作る  
 つもりなれば此景色だけは下繪を付けん互に競ふて矢立鉛筆  
 を取り出ししばらく無言の間に予は睡氣を催せば催し立て歩み  
 出し堤をはづれ總寧寺の山道へかゝる山道といふほどにもない  
 高さなれど歩いては休み休みては歩き出しました或時は亂杭渡り

の曲驅競など途方もない歩き方ゆる草臥たること十里も走りし  
 が如く皆うめき溜息にて面白き話も出ずたま／＼出る洒落まで  
 が苦しいのばかり是から船橋まで眞個のところは何里あらう時  
 計はないが日ざしと腹の工合では三時にもならう半道で三時間  
 とすると迎も今日中に船橋までは覺束ないと悲しき音の出るに  
 鶯の聲も耳には入らず喘ぎつ呟きつ漸やくして總寧寺に到り  
 人氣なき本堂に這ひ上りて一息すれば大寺の板の間冷々ど心地  
 よく皆打ちかへりて誠に極樂々々、急には立つ勢ひもなし左れ  
 どもまた此に暇は取れず僧だか俗だか分らぬ老人をたのみ鴻の  
 臺の古城址へ上れば山はもとのまゝなれど兵營に狭められて折

角と登覽の直打なし

(六)

國府の臺の云立を能加減に聞き寶物拜見は御免を蒙り勞れ足を引ずりて廣々たる練兵場を横切り裏手より弘法寺に入る此寺二三年前に焼けて舊觀なし特に目ざして來りし楓樹三株とも皆焚けて憐なりたい山門前の崖より眺むれば眞間の入江の昔懷れて茶店に掛けし腰立がたし風光を賞するか將た草臥たか但し古へをおもふか噫といふ聲頻りなり山門を下り手古奈の祠に詣つ手古奈とは少女の名なり今より千五百年ほどまへ此に凄い美しい娘がありて男に彼是云れるがうるさしとて入江に身を投げて死

したりそれが名手古奈なりといふ又太宰春臺の説には手古奈といふ娘が繼母に責められて身を繼橋のもとに投ぐ故に其地を繼の里といふ是はチト當推らし此に手古奈考一篇を添ふべきなれど實を明せば江戸名所圖繪成田名所圖繪萬葉略解等に委しければ抄出の尻尾を捉らんことを恐れて省く何にせよ縁なき所ならねば祠に詣で繼橋を渡り手古奈の噂ながら弘法寺の大門を市川と入幡の間に出入んとす此に至りて思軒氏の弱りさ甚だしく呼ぶも返事が出ぬほどに跡に下り其足付を見れば左り右り緋れるやうにヨボくたれば是をテレコ足と嘲めども辯駁もなし得ず「吁浮世ぢやチア」と一足ごとに太息なり一行のうち太華山人の

外は皆此の「吁浮世ぢやチア」が傳染して道の掛どらぬこと蘇鐵の實生の大きなるを待つが如しノタリくも止まざれば恐いものにて兎も角も八幡の街道へ出でサア梨を買て上げるからよくお歩きよと南翠翁犯則の私錢を出して圍ひ梨をもとめて分たれたれば其車に咽を濕し今一勇氣と踏出す向ふより馬煙を立て御馬の御前一行の跡を追ふて參られたり是に氣を得て一行の足も軽くまた無用の旅具は其馬につけて江戸へかへしたれば身輕一層身輕となり八幡神社にぬかづき八幡不知森にかゝれば櫻を纏ふて藤の花盛りにて目を悦ばせぬ此處に參詣の人あるや近ごろ茶店二三軒あり一景氣つけんとす奇を好む世の中八幡不知の

森までが流行出すか後も見え透くわづかの藪なれど水戸黄門光圀卿が入つて仙人に逢つたなど俗書や講釋にあるので怖れを抱くものも有るが此森何の由緒あるか正しき傳へなし地は八幡なるに此藪だけ行徳分なり夫ゆゑ八幡の八幡知らずといふとか又將門の類が此で亡びたともいへど八幡社のもどありし地ゆゑ界を立て人の入ることを禁じたるならんといふが穩かなる説なるべし。一行七人となりて大に力付きぬと悦ぶ間に五人となり思軒幸堂兩氏紛失したりオヤ／＼藪の中へでも迷ひ込みはせぬかど見めぐらせば遙かおくれて人力車を掛合中なりソラどうく降參したと笑ふうち失敬御免宿へお先觸にまゐりますと合

乗にて驅過ぎたり羽虫々々と叫べど聞ぬ顔も憎し五人は此腹愈  
 は最早規則を守るも冗なり一奢すべしとて「そばうんどん」の目  
 印ある所へ飛び込み殆んど手古奈時代は酒もこんなもので有た  
 らうと懐古の情に堪へざる美酒を啜り蕎麥うんどんをテレコに  
 したためドウセ拔驅をされたからには思ふさま兩人に待たせて  
 やらんと中山の法華經寺へ悠々と參詣し月出て風冷やかなるに  
 もまだめげずさぞ兩人が餘り遅いと心配して居るだらう其心配  
 が宜い氣味だと八時ごろ船橋へ着き燈の印に佐渡屋といふに入  
 れば兩人は奥座敷に浴衣で膳に迎ひイヤ餘り遅いのでお先へ始  
 めましたドウモ松魚は妙です兎も角も一杯やつて夫から湯とな

さいと我家へ客に呼んだ程に心得切て居るに先刻のテレコ足は  
 如何だと詰つたところが口惜さは止まず併し先づ一同行倒れど  
 もならざりしを祝して一泊す（此に至つて名々大氣焔を吐くの  
 事あれど南翠翁の紀行にゆづる）翌日は御馬の御前の懷中を當  
 に我劣らじと法則を犯し行徳の志がらきにて一酌し此より船を  
 命じて山谷堀まで着けさせ根岸の鶯春亭に草鞋を脱ぎ塵の汚れ  
 を洗ひて叱られぬやう己が家々におどなく歸り着ぬめでたし  
 めでたし



さ き が け

(一)

天下の梅見に先だちてうめみ、天下の樂みにうかれて樂しむ、これ六遊老の氣なり、六樂人とは誰ぞ幸堂得知幸田露伴太華山人檜崎海運久保田米僊の五氏と拙者なり、十一十二の二日休に例月の二日旅行を持込み杉田觀梅と三十日も前から約束きまりたればまだ咲かぬのは覺悟の上強情我慢に十一日午前八時新橋發の汽車に乗らんと、數寄屋町の新居を出で兼て待合所と定めたる丸屋町の露伴子の許に到れば隣家の大時計八時を打つ仕なしたり近を頼に後を取りしかど慌て案内を乞へば和尚様昨夜出

たまふまだ戻らずといふ自分が觸番に當つて八時と觸出しながら昨晚からまだお歸りがございませんとは氣樂過る定めて駈付た皆が怒りましたらうと云へばイヤ何方もまだとはイヤハヤ呆れ果たる者共と先陣の檜崎氏地團太踏むを拙者物柔かに押しめ觸番の横着なるを見ぬきて定刻に參集せぬ人々の不埒は恰も案山子の動かぬに馴れて弓矢にとまる稻雀のやうなもの本尊が案山子で外が雀それを相手に諸事貴重面の兩人があらがふは大人氣なしマサカ四人揃つて日を忘れもせまい停車場へ直付の人もやあらん行て見んといふところへ別段氣の急く様子もなく戸毎にひらめく國旗の色をうつして御大祭日面にて露伴子フラーと

歸り來ぬ時間おくれたれば鎌倉より金澤に廻らんと道順の事な  
 ど打合して餘の人を待てど來ず是では九時の汽車にも後るべし  
 我々兩人は米僊氏方へ罷向ひ今玄關の式臺で顔世御前が差出す  
 山高帽子を取らんとする其手を止めてヂット見おろし「お早く  
 お歸り遊ばしませ」「ム、」と向ふを見込んで左の足を踏み出す  
 を木の頭杯と例の芝居事して居るを引ずりて參るべしと何かに  
 付けて世話好の兩人また御苦勞にも櫻田本郷町の河岸通りを寒  
 風に吹かれながら米僊氏の家をさして行く新幸橋の袂にて向ふ  
 より米僊氏の「御臺に心引かれてや願みがちに躓く小石我家の  
 門を戀しげに」とチヨボの欲しさうな軀にて來らるゝを見かけ

待つて三人新橋の停車場に到りて見るに露伴子も來ず幸堂太  
 華の兩氏も見えず九時の汽車のはや發せんとするとき太華氏は  
 例の鐵砲を擔ぎ幸堂氏は道行振に昔の通を見知らせて來たりし  
 が露伴子まだ來ず汽車は煙の母衣を引く時になりて駈付たれば  
 鎌合せに間に合ず汽車通もまた此に至りて大通の極といふべ  
 し、あどの發車の一時間いかにして待たん丸屋町へ歸りて一杯  
 やらう、近所で一寸息を吐かうなどさまゝの説出るうち幸堂  
 氏一寸醫師へ行て來るとして出行たり今發す汽車を前に控へて醫  
 師へ行くと途轍もないと驚くうち老人ニコ／＼と歸り來たり  
 藥を貰つて來たよと袖の下から出すは酒の饌之にて一行少し色

を直せば太華山人の腰に付けたる獲物袋より辨吉の煮染出でコイツ當人が放す鐵砲には似ぬ大あたりと賞讃し十時發の汽車に打乗れば幸ひに此汽車横須賀に直行のしかも急行なりしこそ嬉しけれ(ト云へば通に聞ゆれど大船に汽車が止まると一行至極心得たる顔にて鎌倉行に乗り換んと飛び出すを深切なる婦人坐隅よりモシ鎌倉へ入らッしやるならば横須賀行ですから此まゝでよいのです乗換ると東海道へ行きますと教へ呉れたるに頭を掻いてまた元の汽車に乗る眞先かけて飛出したる太華氏呼び返されたテレ隠しにナニ僕は便所を探しに行たのだと云譯せしが小便に行くに鐵砲と酒の罎を提げずとも能からうと駄目をお

されて大にクソニヤリ、併し此にて幸堂氏一美人に箱入の盃を貰ひ夫れから此方「横須賀へ行かう〜」と囁語のやうに云ふ一事件あれど天機を洩らすのちそれあれば省く

(一一)

懐中のまた其中の時計たしかに正午といふころ汽車は鎌倉に着きぬ、太華氏は鐵砲の手前烏ぐらゐは驚かさゐるを得ずとて左も勇ましくヂットして居ては寒くて堪らぬ扮装なれば畑道を傳ふて林の中に入る五人は八幡宮正面の鳥居より丁寧に段葛を歩みて神前に到り一揖して角庄に入りて晝食を命ず是まで天氣も麗に一行も機嫌よく誠に無事にて紀行の餌食となるものなし

夫れも其筭皆四五度目にて圓覺寺の案内して此方へ賃を貰はん  
 と云ふ通なればなりと通がつて居る所へ此家の主なるべし出来  
 りて挨拶し頓て寶庫を開いて猫と而して鼠が乾固りたるを硝子  
 箱に入れたるまゝ出して土中出現の珍木乃伊なりと示す諸氏感  
 歎措かず箱に頭を聚めて妙と稱す次にまた大木魚出づ木魚開き  
 て中に妙絶の彫刻物あり諸氏又不思議々々々と連呼す予は風邪  
 氣ゆゑ片隅に寐ころびて茶菓子の羊羹を下物に饌の殘酒を飲み  
 居たるに寶物見する主は飽かぬ心地やしけんエヘン鎌倉へ御出  
 になつて古物を見なければ一向つまりませんと獨語の如く又一  
 行の襖方中に少し茶の氣味がありしを憤慨するが如く云ふ予此

一言に驚き起直つて其寶物を拜見す主尤も尤もらしい幸堂氏を  
 捉へ此木魚は伊太利の公使が始め五百圓に付けて次に千圓に買  
 ふと申し込んだが私はなか／＼賣ません若し伊太利國の地面十  
 里四方となら取替やうと云てやりましたと話す一行アとばかり  
 顔を見合せて其有難味に驚く傳へ聞く趙氏に七十五の城と取替  
 やうといふ玉げた玉ありと今や鎌倉の角庄に伊太利の地十里四  
 方と重を競ふの木魚あり定めて此家へ宿泊する美術鑑賞家は此  
 の猫と鼠の乾物を法隆寺寶物中に蛇骨あると同じ杯と詞を盡し  
 て賞揚せられしならん我輩鑑識の明なしました主を満足させて此  
 寶物に一層の光を増す褒辭なきに愧入たり（或一人は是は猫間

の猫と義高の鼠と力を争ふて其まゝ乾固まつたのではござらぬ  
 か其事なら頼豪阿闍梨怪鼠傳に出據がござると云掛けたるゆゑ  
 予は目くばせして其鑑誦の不當なる事を知らせたり中に氣の毒  
 の山を上たるは露伴子なり一列並に何とか挨拶せんと運慶の作  
 といふ佛像を見るととき不圖口をすべらして運慶と辨慶は何方が  
 強いと云出たるより此人は美術思想なきものと見極られ、一行  
 には笑を忍ぶ苦みを與へ、叱られて辟易し、辟易して、却つて  
 大に當人得意を極め當日第一等の出来は……と鼻を蠢かしぬ、  
 左れども露伴子全く美術思想なきにもあらねば此大喝采の大恥  
 辱に憤激して是より土中出现の物に矢鱈目を注ぐにいたらば元

337600

より心力剛盛の男なり忽ち初一念を貫きて天賞堂の廣告中に美  
 術意匠依囑の大名を輝さんと遠に非ざるべし種々の寶物拜見  
 の後御名札を頂きたしと一帖を出す其帖を開きて見る中に川崎  
 千虎といふ名刺に何月幾日此に一宿すと細書して外に何々と肩  
 書ありこれ予が知人の茶六大人の事なればびたりと打悦び素知  
 ぬ顔に帖を閉ぢ借徐ろに女中に向ひ何月幾日に川崎といふ人が  
 此へ泊りはせぬかと問へばハイお泊りになりましたよく御存じ  
 と答ふオ、左様だらう彼は僕の友達だがなか／＼美術品をよく  
 見るよと此一言は先程より始終傍らにありて予を露伴子並に美  
 術思想なきものとあざむ氣色ありし下女忽ちにオヤ／＼左様で

入らツしやいますかオヤマアと大に敬禮の意を表したるやう見  
 受けられたり、よき友は持ちたきもの名だけ假て功能斯の如し、  
 此を出で、八幡宮に参詣し、祠官箱崎氏が集めたる古物類を木戸  
 錢ならぬ五錢の拜觀料を出して見る

正誤 昨日の書出しの文は天下の愛に先だちて憂ふ云々の范  
 文正公の岳陽樓の記をモヅリしなるが記憶精確の小生もたま  
 にはあやまる事ありて其文を司馬温公の獨樂園の記なりしと  
 思ひ六樂人の氣と洒落たつもり其儘出さば大恥なるべかりし  
 を校正者に博通の學者ありてこれを六遊老として暗に岳陽樓  
 を聞せ呉れたるは幸ひなりしトコロが下にまだ六樂人の三字

(三)

直し残りて何かオツなものに聞ゆれば此に正誤すまた中程に  
 見おろしとあるは見おこしの誤り是も上を向くと下を向くの  
 違ひなればついでにト斯ういふと大層念が入るやうなれど拙  
 者が例の綿密ゆゑ外に誤りも多かるべし其處等は宜しく作者  
 になりかはり讀ながら御直し願上候

六百年前の頼府の跡とて鎌倉は何時來て見ても長閑にて面白し  
 幸堂氏と予は五錢の拜觀料を悲しむにはあらねど角庄の古物に  
 て満腹したれば箱崎氏の方は見ず石階の下の芝生の上に足を伸  
 してまだ蓄も固き梅を眺めて風流は此にありでグスと負を惜

む、四人は急に古物家がらんと野心にや長い間出で来らずや  
 がて笑ひどよめきて下り来り義經の陣羽織青砥藤網の燧袋など  
 いふ珍品多かりしが梶原の拜領した頼朝様の頭巾はなかつた併  
 し運慶の作の辨慶の像はたしかにありて露伴子大に氣焰を吐き  
 たりと語る田の畦を横ざりて往還に出で榎崎氏と予は花水橋の  
 土留石二とも倒れたるを起し居る間に米僊子は寫景をはじめ三  
 人は明礬を出して酒を買ふ此邊に骨董屋兩三軒ありていづれも  
 土中出現然たるものを排列す銘々堀出しをして古物家がらんと  
 眼を皿にしたれど椀の缺も買得ず五人は頻りに狂歌發句を口ま  
 かせにして我褒するうち太華氏は彈丸込して小鳥を狙ふ、熱心

と熟練の妙は實に驚くべし銃の音にしたがって鳥の落ること無  
 數、但し皆空へ向つて上へ落つるにて下へ落つるは稀の中にも、  
 稀なり榎崎氏我輩に呼いて曰く出立の甲斐々々しき上より見る  
 も太華氏の手際はではあるまじ思ふに今日は志す佛の日にて鳥  
 の他人に打たれんことを悲しみ砲を發して追逃し置かるゝ積な  
 らん偶々彈丸に中るは鳥が逃げるはづみに誤つて向ふから中り  
 しなるべしと予も此説こそ的の圖星とうなづきぬ、功臣寺に入  
 りて穴を覗き畑道に藁を掘りなどして頬焼の阿彌陀に來る、此  
 の標石押倒されて畑の中に埋もれしを見てイザ是も引起して元  
 の如く建置かんと米僊子榎崎氏捲り手して掛れば予も力を添へ

たれど此石臥て居る方が樂で能いといふ了簡にやいかに勇ましく掛聲するも立直らずつひに力及ばずとして臺石だけ直して立去りたり、願ふに此石運動書生の悪戯に一寸押倒されしものなるべし、嗚呼倒す時には下宿腹の書生が一本の指の先にても餘り、起す時には和田殿の三男と腕押もすべき我々三人が六の腕へ力を集めてエイヤウンを叫びても足らず、天下の事すべて斯の如しと大に感じてイめば柿の枯枝に鳥ありて啞と啼かんとにや口を開きしが音を出さずして我方を心有りげに見るはかれも長大息する事あるにや、日は傾きかけて風寒し朝比奈の切通しの茶店に一憩ひして急ぎ足に下る、金澤近くなれば濱より吹上

げて夕風いよ／＼身に染む、冗も洒落も寒に凍り草臥にあぐみで出ず辛うじて金澤の千代本に着く、御生憎さま御座敷がとは云しが一行の氣高き崇高さにおどろきてか奥の座敷二間俄かにあけて請じ入れたり風呂に入るとは名のみ皆咽喉の渴きに急がれて酒盃を手にしたり飲めば寒も草臥も忘れ腮の掛金を外して打興じやがて次の間へ二行に六の頭を並べて臥したるが隣席は女まじりに骨牌を弄びて喧すしきこと勞れし身も眠られず頭を夜着の中に締め耳を塞ぎておづかに眠につけば晝の美術事件腦に印をのこせしと見え予伊太利國へ洋行し盛んに美術の講義をなすと夢みて覺れば身の汗拭ふばかりなりし、實に夢は可笑き



ものにこそ、他の人々はまた如何なる夢をか見られし、聞きほしき事にこそ

(四)

夜の中に雪は積りけり、寒さ云んかたなけれど朝晴て景色よければ、腹中へ温石懷爐灰の類を入れて其勢ひにて金澤の宿を出づ、群鳥の朝立つ梢花をこぼし鹽木つむ苦屋の垣匂なき梅と眺めて、風雅の二字を堪力に縮みつゝ行けば、風さへ已寒きにや枯草にすがりてヒューヒューと泣く、其聲を聞けば涙ならで涕の垂るゝぞ憐なる、能見堂にしばらく休みて我息にて我手温むるもわりなしや、一行の顔を見れば雪焼けにや鼻の先の赤くな

りたる、可笑しとも笑はれぬ有様なり、左れど通はかへつて雪の爲に凹凸を坦にしてよし、假にも二日旅行といふに米僂氏不埒にも駒下駄で鼻唄なり今に跣足になつて悲しがるで有らう夫に引かへ中下駄のくせに出がけに草鞋買し幸堂氏は用心過て事々し、一人は平氣に過ぎ一人は取越苦勞に過ぐ、共に旅通といふべからずと笑ふうち果せるかな横濱道を杉田道へ分れの掛茶屋より二三丁下る坂道の雪の中ツルりと迂りて畫心に(鳥羽僧正の)轉びたる米僂氏の格好賽錢出しても拜みものなりし、幸堂氏の草鞋はつひに用ふる所なくト云てまた捨もならずや邪魔にしながら江戸迄持込たり物持のよき人なれば來月催す月瀬行

に必らずこれを取下さるゝならん、下りて杉田の海の見えそめてより勇氣付きまた歩くに躰熱おこりて寒いなどいふことは忘れて例の如く矢鱈に妙景がる、杉田の村の入口に子供五六人居て太華氏が鳥を探し廻るを見て伯父さん鷹を打てば能いと云ふ太華氏眼を見はり何處に居るゝと問へばアレ彼の木に指さすドウ何處にと一行も足を止めて其指方を見る、ナニそ彼木に先刻居たがモウ飛んだよと笑ふ、子供の弄りものとなるとは儲々イヤハヤと一行落膽する機會に腹もドカリと來たれば此邊にて晝の支度せん夫には何家がよからんと探せしがまだ梅は早ければにや茶店もやうく作立中にて思はしき所なし里の娘に

問ふて其教へのまゝ入し家は圖ざりき先年露伴子と共に頭を掻し殼蒸の古跡なり、これはと思へど外になければ廻る因果の車坐に並びて自然の成行に任するのみ、床めくところに三味線二挺たてつけ悪き障子のあなた、別席めくところに十二三より十四五ぐらゐの學校生徒十四五人教師らしきも添ひながら煙草を吹かす酒を飲む女にからかふ悪戯する其状見るに堪がたし、或學校は教員がお守と幫間持を兼ねると聞く噂も嘘ではなかりけり、ト餘處に心の馳するのも此方へ膳の運びゆゑやがて海松鍋といふ珍味にて醬油の中へ水と酢を注ぎ込んだやうな名酒を飲む、飯の出來るを待つこと二時間三時すぐるころ此を出て濱邊

を傳ひ隧道を抜け西洋人の遠乗に道をよけるなど極めて詰らなく石川の堀割へ出で道に迷つてつひに車夫に生捕られ、これが六大通の成る果か、ハツクシヨ、ドツコイ、を掛聲に横濱停車場へ着き五時の汽車にて命からく歸りしは目出度かりける事共なり

附記 杉田の梅の盛りは土地の人も今月下旬といふ「見渡せば里は霞にうづもれてそこはかどなく梅が香ぞする」など、妙觀寺の山より見下して眺めんは來月上旬なるべし、今も早きは其處此處に香を放つ、眞に風雅の士たらんものは成丈け寒き日を選び早く行て替はオツだと賞し玉へ、若し志からず

んばこれ通にあらずして俗物のみ、俗物と云るゝが恐ろしくは、此一行の通に倣へ

水戸の觀梅

(一)

鐵道割引の廣告を見て水戸の梅でも行て見やうかといふ風雅心より友達二三人を東風ならなくにそよくと誘へば主なしとて宿は一向平氣と馴れたる飛梅連中、直にも飛出さんと魁を競ひしに、梅一輪一輪づゝの寒さかなともいふべき天候の逆戻し、開きし梅のかじかむ如くに縮みあがり、此風道中はなるまいと

拙者貴公御同案に辟易し居たりしに、幸堂得知氏の許より突然  
 端書到來し、寒いは元より風流の骨髓、此を我慢せねば通とは  
 云へまい君が行かずば僕一人にても出掛るその大奮發、錦繪で  
 見た淺尾工左衛門の白太夫ともいふべき氏さへ此勇氣あるに、  
 竹之丞の櫻丸に儼が似て居ると定めて人が褒てくれるだらう  
 と自ら信ずる拙者、何度引いたか分らない風邪氣ぐらゐるに怖  
 をなし、榎子木で腹を切るやうな茶番面をして居られんやと二  
 月廿七日の朝、筑波嵐の烈しきも其方へ向いて行く旅と思へば  
 少しは堪へ力、川風寒くすゝり込む、はなに氷の隅田堤、車を驅  
 つて上野停車場へ午前十一時に走せ付けて見れば思ひきや得知

氏の外に久保田米仙文の舍秀茂の兩氏待つてあり、此の寒い  
 風流も四天で荷ふとなれば大きに肩が休まる譯と、勇みを付け  
 るは得知氏の手荷物、チラと見たるは一升入、是さへあれば片  
 枝ならで脈が通ふと早や梅の花が眼に見える心地此では開かぬ  
 くと北向の陰氣、下等汽車の隙たるどころへ西向に坐し、今  
 や發せんとする危機一發、天拜山の梅王といふ見得で驅付られ  
 しは早川南甕氏、米國通を見知らせて鑑合せに乗込しは手際な  
 りしも、氏と米仙氏は我黨儉素家の憲章を奉じ下等に乗るはチ  
 ト苦まれし様子にて是は存外隙て居て而して車も新調が奇麗な  
 ど、客に來たやうに頻りに會釋せらるゝも可笑、此行も國會

新聞の野崎左文氏の催しにて其はづみには彼の川柳點に「江の島へ口でばかりの連が殖ゑ」の格にて十人二十人にも及ばん勢ひなりしが、箆ひ揚て見ると寒がり坊朝寐坊ばらくと落てタツタ得知氏と予の二人となりしに、粹は孤ならず、思ひの外に米仙秀茂南甕の三氏、梅松櫻の盛を添へられ、特に此行中にては予はまだ息子株の年配なれば懷中より手を出して繻絆の領を捻くるの権利あり、腮を撫つゝ欣々たり

## (二)

酒は汽車で飲むが格別趣きがある以來此御座敷を借りる事にせう我儘の云人がなくて能いとは得知氏の發明、汽車中へ鳴物を

入れた大陽氣に鐵道の人に御停止を申付られしとは米仙南甕兩氏の懺悔談、隣座の女連より大分お賑かでござりますと詞を掛らるゝまでに至りたれば、予獨りつらく思ふに、最初の觸出しは午前六時四十分發にて同十一時五十分水戸着との事ゆゑ水戸に着きての上にて指す方も定めんと心安かりしが十一時二十分の此の汽車にては午後四三時十分ならでは水戸に着せず暮て時をもとめんこと知らぬ土地には心細し人々あまりお目出たくならぬうち心覺えに聞置んと問かけて見れば皆はじめて、只幹事の得知氏こそ水戸通なれとの事に、通の字が付ては危ないぞとだんく同地の模様を聞けば、だんく答が怪しくなり、終

に實は僕も初めてだが左様いふと氣遣がるから通で居たのだ併しよく聞て來たから大丈夫、汽車を下りると直に水戸へは何様參りますといふやうなドヂは爲ないマア安心して大船へ乗た氣でと云ふにいづれも驚きて忽ち水戸通の號を奉りしが、此問答を傍聞せし商人躰の男、得たりと其處へ口を出して眞の水戸通を振廻したるに頭を搔くと多かりけり、栗橋へ來ると靜女の墳までの講釋、米仙氏堪へされず欄を隔てし女中の間を幸ひに割菱縫ひたる水干に丈なる髪を高らかに結なしなど、鎌倉に舞ひたるとき居合せて見たる如く云ふに流石の眞の水戸通も口を閉ぢぬ、其の中へ彼の傍の小さい墓は娘の達の靜女が義經を慕ひ

て起たるまゝに凝固まりて彼墓になりしなど茶を交ること我劣らじの中にも南甞氏は婦人の座と後ながらに相對し矢頃よきまゝ隨分の大砲、予また竊に謂らく婦人の質は淡々しきものなり、此一行の紳士然たるに信じ此大砲を眞鞆にうけ靜女の望夫石と思ひ込みては氣の毒なり左れど今云ふとも我が年若きを侮りてかへりて誠とはすべからず要こそあれと思ひたれば其時は口を噤みぬ、今こそ此に誠をいはん讀て惑を晴されよトハまた大きな忠義ぶり知たかぶりを並べんに

靜御前義經の跡を慕ひ奥州へ下らんとて栗橋の西四五町（今は同停車場より二三丁）の所に來りしに義經は早や高館にて

討たれ玉ひぬと聞き歎きのあまり其處にて没りぬ土地の人憐  
みて同所の高柳寺に葬る、高柳寺後に中田宿へ移りて光了寺  
といふ墳は其まゝ印の杉の下にあり寺には什物として静の舞  
衣を納むこれ神泉苑にて雨乞の舞をなしたるとき後鳥羽天皇  
より賜はりしものにて雨龍の舞衣と名づく(文は雲鶴の如く  
其國諸書にあり今も光了寺に藏す)享和二年二月中川飛驒守  
これが爲に碑を建つ明治二十年岡千仞文を作り金井之恭字を  
書きて新たに碑を建つ(舞衣縁起、碑文、閑窓瑣談等)義經記  
に據れば米仙氏の云れし如く割菱の水干着て舞たる後京に歸  
り母禪師と共に北白川の宿所にありしが義經討たれしと聞き

剃髮して天龍寺の麓に庵を結び二十歳の秋つひに空しくなり  
しとあり、いづれが誠なるやらん、利根川圖志には此處には  
侍女琴柱の墓また静が奥州へや下らん都へや歸らんと思案し  
たる思案橋といふもありと記せり小さき墓は琴柱のならんか

## (三)

旅にして嫌なるものはカへ事として車夫に賣らるゝこと、汽車で  
弱るは乗替なり、何でも彼でも橋を越さずは人間の千石通し  
に似たり、小山にて此の糠と粉米のふるひ分に出合、水戸行の  
汽車に乗替んとすれば、いづれの室も充滿して入るべきところ  
なし、上野にては早く先に乗りたれば主たる格なれど此では客

の身分としてモウ入れませんよ杯と乗込居る人に拒絶さるゝなど  
 能い器量のものではなし、南甕氏大に辟易し切符を換へて中等  
 へ乗らんとすれば中等は一輛ざりにて是もギツシリ、鐵道の人  
 に如何か此五人を安置する工夫はないかと頼めど上等なら空て  
 居ますとばかりなれば、迎も苦み次手下等にて我慢すべしと込  
 合中へ面も振らず割て入りしが予は一人放れてしかも我酒の壇  
 にも別れボンヤリと赤毛布の中に交り詮方なしに外套の隠袋よ  
 り本を出して讀居たり、結城を過ぎ川島といふ停車場へ着しと  
 き得知氏に救ひ出され俊寛漸やく平判官や丹波の少將と共に  
 赦免の船に乗る事を得たりけり、乗客の斯く非常に多きは時し

も舊曆の二月初午、笠間の紋三郎稻荷へ参詣群集するゆゑに  
 てそれが爲に臨時汽車をさへ出したりとぞ、此邊より筑波山は  
 下駄がけで驅上るほどに近し、下館よりはわづかに三里なりと  
 聞き登山の動議も發りしがいづれ歸途の都合といふ委員附託説  
 にて過ぎ岩瀬福原を経て笠間に着き汽車の窓より見るも實にお  
 ひたししき賑はひなり、此にて遙に伏し拜み御利益を以まして  
 歸りには壓鮓の苦みを免れさせ玉へと賽錢なしに祈り奉つり  
 ぬ、あたじけなさに神や涙を溢し玉はん、此よりは参詣歸りの  
 人また一際乗り皆人ごとに小さき籠へ胡桃菓子といふを入しを  
 家苞に携へたり是れは紋三郎稻荷の社の傍に胡桃樹ありて胡桃



下の稻荷とも呼ぶが故なりといふ、予文の屋氏の袖を引き此稻荷いかなる利益あれば斯く繁昌するにや由緒を聞て玉はれと云へば氏はうなづいて赤毛布被りたる人に向ひてモシ此お稻荷様は何に利ます、と卒直に賣藥の効能問ふやうに云ふに、毛布先生打笑ひ、何に利くといふ事もござらぬが神に參れば心も清々しくなれば、先氣を改める爲でござる氣ばかりのものさアハ、と反對に安く見たる此の答の立派さにさすがの文の屋氏二の矢が繼がず、問やうこそ悪かりけり答はまことによかりけりとトツと笑ふに毛布先生も打解けてさま／＼物語のうち宍戸内原赤塚と過ぎれば右手は水浅き大沼左手は高き丘にして梅花點々幾

百樹これ問はずして水戸の公園なるを知る、水戸着の時間は四時三十分なれど此日は乗客混雜の爲にや後れて三日月は早や光あり、汽車を下りては見たものゝ水戸の市へは何方へ行くか知れず、今宵は遅し梅見より海見を先にすべしと停車場前の茶屋に休むが早く車を命じ大洗をさして走らせぬ、大洗は水戸停車場より四里下市を出はなれてより平坦の田圃道末細り行く野川に沿ひて磯濱といふ町に入る此町なかなか長く暮るにつれて風はますます／＼寒し、濱に出れば左に松林ありこれ磯崎神社なり一の鳥居を入りて大洗に着き金波樓といふに御神輿をば昇居たり

(四)

大洗の磯前神社は國幣中社にて祭る神大已貴命とは南甕氏が宿の女に問ひて知りしところ暗の夜に參詣もなるまじ先づ湯に入りて寒さを凌がんど潮湯や沸てあると問ふに只今では客様も少ないのであま湯ばかり夫も只今沸かしますとのこと先づ例によりてジャン拳にて先陣後陣を定めしに余は情なくも殿となり文の屋氏と共に冷物でございと入て見れば温湯がチヨボク今沸いたのが出ますといへど夫を待ほど心のどかなれば至る所ごと失策をするものかと予は飛び出したれど文の屋氏は温泉育ち是ぢやア迎も出られないと湯の中で寒がるも可笑し、此で斯く寒く縮みしは後に大に伸びん爲か文の屋氏導火線をつける

と米仙氏とは日光以來といふ不思議の婦人（米仙畫伯に申す此の處は塗抹のうへ奥方の御覽に御供へあるべく候）火藥庫破裂といふほどの騒ぎを始め藝妓二人を四人にて責さいなみ彼もないか是もないかの果は三味線を此方へ取り上げ二人に替古を始め磯に寄せ來る大波も恐れて遠く沖に引かん勢に予は壁際に押込められ石摺の弘道館の碑文を見ながら此の末どんな事になり行くかど危ぶむのみ斯う四人揃ッて洋行されては堪らぬぞ古人も云れた無佛の處に於て尊を稱すにて相手を直下に見てへチた事づくめ、ナンノ何時でも廻り甚句に井を箸で叩きながら、一廉通になつた氣で颯を撫るが憎い此女めも日光だか筑波だかい

づれ飛廻り者ならん、ヤレ怖い事、高時の天狗舞を襖の蔭から  
 密と覗いて見たら大方此様なであつたらうと心の中に眩きぬ夜  
 の更るにつれてさすが四人も騒ぎ草臥、漸やく鳴は静まりて、  
 波の音また高かりけり、大洗の日出は見物なりと豫て聞けば勞  
 れながらも朝起を心かけ午前三時ごろ三階の雨戸を明けて海面  
 を眺むれば東の海際や、色づきて何となく神々し、又衾引被ぎ  
 志ばらくして再び出て見れば空も水も一きは暗きうち色づきた  
 る海際のみ金色に紅を帯びて明かなり、又夜具の中へ潜り入り  
 又志ばらくして又出て見れば海と空はほがらかに分かれて見え  
 金色の光目にまばゆし、やがて沸き上るやうにして旭は波を放

れて赫奕たる、此瞬時の景勇ましく清々しく、ヤ、ヤといづれ  
 も歎賞の聲を絶ず、米仙南甍の兩氏昨夜のズボラに引かへて眞  
 面目に此景を眺め岩波の状を手帳に留められしはさすがなり此  
 地に客舎五六あり小林、金波、魚來庵の三軒は海に臨めり、家  
 の大きさは金波樓第一ならん、魚來庵は古くよりあり食物もよ  
 しといふ、朝の食事終りて磯傳ひに遊ぶ、神磯といふ岩に波の  
 かゝる景色何處にもあれど面白し、磯前神社に詣づ、神さびて  
 よき社なり此は御料地とか林の中に躑躅多し花の頃は麗しかる  
 べし、幽邃とまでにはあらねど濱邊に森の茂りたるなれば所が  
 ら珍しき眺なり、夏のころ海水を浴び此の林にて涼みなば快か

るべし、此より得知秀茂の兩氏は祝町とやらんに見るべき所ありと止むるも聞かず別れて急ぐ、あとの三人はもとの金波樓へ歸りて一憩し、昨夜乗り來たりし、車夫等の此處に泊りて待つありしに乗りてまた些の變化もなき四里の田圃道を水戸の方へと走らす、大洗も此四里がないと來ても能い所だと云ひたる者は誰なりけん

(五)

車夫の案内にまかせて水戸の城を見る、險を以て守らず人を以て守るといふ古訓にかなひ分内狭くさせる要害なきほどにかへつて勇武なりし事をおもはる、今は師範學校附屬小學等あり、

傍の一丘を問へばこれぞ世々此の國を領したる佐竹の古城趾なりといふ、佐竹義宣石田三成と交り厚く關が原合戦の時上杉と心を合せ後を襲はんとて兵を出だしたる罪により常陸八十萬石を六十萬石削られ出羽の秋田へ二十萬石にて國替せられたるとき義宣の士大將車野丹波組の者六人引つれ白練に火の車を書し指物にて城の中へ切て入りしが城請取の本多正信の勢に討たれたりといふ、誠に新羅三郎より傳へたる國さへ取上られ此城おめく渡さん事の無念さに死を決して切込しは無謀には似たれど其の志しは勇ましく今に思ふ悲しき事なり、弘道館は今第二の公園と稱するよし(借樂園を第一公園といふ)館の半を

幼稚園とし梅花の間に子達の遊ぶいと可愛し、館の後の園中に鹿島神社あり有名の弘道館の碑等あり、梅花は今年は霜になやみて開損ねたりといふも霜解にてあまり花のみ見ては歩けず此の後には縣廳なりといふすべての建物が質素なるは水戸家の領地の人氣にかなひて奥床し、左れど車夫などは是を土地の恥のやうに思ひて此の縣廳などは他縣の郡役所ほどもござりませぬ杯と頭を搔くは其業として他縣へ出る事多く他縣の飾立たるを見て早や其眼となりし故なるべし、水戸の公園に斯くわざ／＼來り偕樂園の烈公隱居の跡を見て心に染みるは此の質素の二字なるに此の車夫公の口付で見れば如何やら偕樂園中へペンキ塗の

ホテルにても立さうなり、城と弘道館を見をはりてまた元の停車場前の茶店に戻り更に車にて偕樂園へと赴く、此道は水戸上市とて第一の繁花の地にて新聞社も三社あり市のやゝ盡るどころより左へ横折れて雷神の社あり、烈公を祀りたる常磐神社ありこれより仙波沼を下に見ての丘山を偕樂園とす眺望かぎりなくよく梅は數千本あり高麗芝一面の廣き原は心も晴々として息あつから虹の如し、亭は筑波山と對面の所にあり對湖亭と名づけ烈公自詠の「世を捨て山に入る人山にてもなほ憂き時はこゝに來てまし」の額ありといふ此は古歌に「世を捨て山に住む人山にてもなほ憂き時は何地行くらん」とあるを一轉して此に

勃たる雄心を自ら抑へられしならん、庵を何陋といふは彼の陋室の銘に據られしなるべし、結構の指圖公みづからありしとにて古雅質素の中におのづから壯嚴雄大なるところあるは面白し、此園のこと委しく記たる書ありといへば餘は略す、東京よりわづかに五時間、朝六時四十分の汽車にて發し、夕の四時五十分水戸發にて歸るとおもへば城弘道館より此の借樂園に遊び籠の茶亭に少酌ほどの間はゆるやかにあり、車夫の賃は二十四五錢を出さるべし、上野、芝の公園元より天下無類なれどまた此位は出て見るもよし躑躅の花候は日も暖かにて一段と心のびやかならん、子女を引つれて一日の遊また惜からぬ所なり、烈

公の事蹟を語り常磐神社に据ある寺の鐘を潰して鑄たる大砲などを見せなば子女に興ある事なるべし

## (六)

午後四時五十分水戸發の汽車にて歸る、車室中一行の外只一人の客が遠くはなれて腰掛たるのみ、往とは違ひて買切の如し、左れど笠間へ着かば其處よりまた參詣歸りが乗るべし何卒御利益を以ましても取越苦勞する人あるゆゑ、予は左はあるまじ田舎の人たちなれば夜に入りて五里七里戻るやうな事はせじ笠間に到るも大丈夫買切ならん若し此室に二十人以下の押込ならば稻荷様の爲に萬歳を唱へ一行の爲に祝盃を擧ぐべしと云しに果

して笠間に來るも乗込少なく忽ち祝盃を開きしが其下物とてか  
 汽車進行の軌道より一二丁のところに出火あり火焰烈々人々狼  
 狽の狀、人の難儀を外にして斯く云ては濟ぬ事ながら實に一奇  
 觀にてとよめき合て見物せり、此火の光にはじめて心づけばで  
 もない先刻より皆心づきたるは若き婦人只一人肩掛に身を締て  
 俯向き勝に時々歎聲を洩らすあり、如何にやせさせ玉ふと詞を  
 掛れば、斯く問はるゝを待しやうに顔を舉て微笑を會釋とし、  
 マア聞て下さい小山から東京へ行くつもりで此通り東京行の切  
 符を買しましたが乗るときに鐵道の人に聞きました切符も改めて呉  
 れましたから其汽車と思つて乗ると此方へ來るのですドウも變

だど下りて鐵道の人に聞きますと是は水戸行だそれは大變な間違  
 だ仕方がない今度水戸から來るのに乗て元の小山へ歸つて東京  
 行へ乗り直せと云ふのです私も知らないのが悪いが切符を改め  
 て置きながら此様な處へ乗せるとは悔しくツて成ません馬鹿々  
 々しいではございせんかモウ／＼此様な汽車に乗りやアしな  
 い、と或は獨語の如く或は話す如く託つに皆々憤慨し如何も怪  
 しからん事などで、同情を表すに、よき伴得たる心地やしけん、  
 貴君方と御一所ならば心強うござりますと悦びたり、女性の一  
 人汽車殊に左様の手違ひあり夜に入りての事なれば心細さぞ思  
 はるゝ、小山へ着きて乗り替るとき、婦人は悔しき震へ聲にて

札を改める人に向ひ先刻札を改めながら水戸の方へ乗せて酷いでは有りませんかと云へば、札改め先生莞爾として夫は寒いに御氣の毒さまと戯ぶる。如く答へしには一行思はず顔を見合せたり、乗りて大宮あたりへ來たりしころ、隅に眠り居たる若き男慌てたる聲にて時計をとられましたと、乗込一同へ訴へる如く云ふ、皆皆氣の毒がりしが小山より乗りて此處まで來るうち下りたる人も多ければ今さら詮議もなるまじと只慰めて其まゝになりしは氣の毒なりし、是につけて思ふに來月一日よりの京都の博覽會には無此類の事多かるべし、博覽會は掏摸の爲に開かれたりと云れぬやう元より其防ぎはあるべきが、地方の人も

自ら用心あるべきなり、上野へ着きしは夜の十時、此に一行袂を分ち、予は文の屋氏と淺草の方へと歩み鐵道構内を出抜ける大溝の石橋を越し二三歩すゝむときポチャンといふ響きア、といふ叫び聲、内儀さん今上げてあげますといふ車夫の聲に引返して見れば暗夜の上に石橋の角低きゆる道と思ひて大溝へ落しなり、此にも街燈一基あらば人助けなるべきに嗚呼氣の毒なる事を多く見聞くものよと念佛氣になれば寒さも強く途中の付勇氣を廢して急ぎ車に乗り、我家へ歸ればホットして、己の命があつて目出たいと目出たがりしぞ目出度けり



おきつ藻

(一)

玉藻のよれば眼もよるく興津行の催し夢のやうに成りて、明日だ、合點と幸堂氏と例の如く急立、自恃庵主此地に病を養ひつゝ坐すること久しければ、眼にこそ三保の松原清見寺と景色の興味に飽き玉はめ、口にはいかで筏の長のと通くる京味を存分にせられんやと己をおして一の趣向、我好を強る俗諺通り神田川の樺焼を携へて押掛んとソコは萬事に拔目〇〇（此處蟲ばみ、案ずるになきの二字なるべし）幸堂氏團扇を煽ぎ六月二日の午前十時神田の神田川に落合しが、儲鰻店主に此譚を話し十

一時の汽車に乗り込むなれば其間に合ふやうに頼むと云へば、店主は困むたる頭を掻き幸堂先生の仰せゆる御髯に對しましても御受申したけれど僅一時間に夫程は出来かねまするかと云をば拜み頼みに頼み込みマツ此間に一杯ナニサ十一時と云たのは向に氣を弛させない謀計で實は汽車の發車時刻は十一時四十何分ソレ此から新橋までを二十分間として二十分は縫上があるのだ急かずにやるべし急くな急きやるな浮世は車が待て居るから大丈夫と始めると了簡の時針の廻轉は甚だ緩やかになり、まだく、大丈夫かね、大丈夫だよ案じたものぢやアない廿分の縫上だよへ、何様なもんだエ廿分チャーンと縫上して置いて向ふを急

て置くといふ智慧はどグット黒人がるところへ店主の深切と骨折にて土産は焼上り、モウお出かけでございませんでとは注意されて急に慌てソラ出かけるよと云ながらまだ徳利を放さずアタフタとして樓を下り時計を見れば南無三寶、縫上がりしは尻を結ばぬ糸にして、發車時刻に十分ほどより餘さず、車夫は團洲の西光を氣取るともなく覺束ないと泣出しさうな迷惑顔、イヤ覺束くよ綱を付けて走れと云へば、其うち手間が取れては同じ事ですマア遣つて見ませうと馳せたるが、悲しや此方二人は鐵道通略して鐵通仙人とも云るゝほどの黒人なれど、相手の汽車が無地の白人なれば話が合ず、曲もなく取残してサツサと出

たあと十分程の後れ、ハット當惑、白人なればする所なれど、鐵通兩人自若の形、其時義經少しも騒がず、と先づ停車場内待合室へは入りしものゝ、次の興津行は午後二時三十分なりといふ、二時間半を其時義經少しも騒がずで繋ぐ譯にはゆかず、第一心づくしの鰻が先方の夕飯の間に合ず、無念ながらも此は電報をかけて向の膳を止めるに如すと、不意に亂入する趣向の底を割つて終に電報の手數となりしが、其後で顔見合せ平生の思案分別といふは此の事、只斯して此に居ては知らぬ者が見て、ツヒ一通りの智慧のない白人と思ふも知れず、軍略謀計一ふるひせずばなるまい、此に幸ひ十二時卅五分横須賀行の汽車あり

是に乗りて大船まで行き、其處にて二時三十分新橋發の興津行が来るを待合せて乗りなば大船まで出越してあるだけ向ふが近くなるに相違ないソレ二時三十分新橋を出る此方は大船まで行て居るソコで大分早くなるわけだらう、成程是は理に合ふやうだ塵劫記といふものは尤もに出来てあるものだ、さすが我輩兩人なればこそ是ほど賢い工夫も付くなれど互に褒めて十二時卅五分横須賀行の汽車に乗る

(二)

首尾よく大船に着き、人間の萬石通しといふもので停車場の橋を潜りしが、不思議な事には此まで來ても次の興津行の汽車に

は二時間餘またねばならず、此上は藤澤まで今一驛出として見やうかと車夫に賃を問は坂道で遠ければ一臺十五錢なりといふ、熟考ふるに此分では羽を生して興津まで行も次の汽車の二時間後は付て廻るに相違なし是を論理法で云へば「同じ事は即ち一つ事である」といふ事になる、此は先づゆるくと大船の景色を賞し急かす噪が汽車の來るを待つが軍法の奥の手なりと評議は決して茶店に入る、奥の手にも先の足にも白人にも黒人にも實は是より外に思案はないやうなれど只兩人の白人はなれがして居るところは前後を思慮し左右を分別し而して後に此舉に出たる悉とく軍法に協ひし事だけなり、突然來てツノと

乗る者など、一にすべからず、幸堂氏茶店に胡座の大欠伸のついでに

待戀や蠅も一つの氣なぐさみ

と噛み出されたり、予もまた名句なきにあらねど其は幸堂氏の道記の方へ出し、予が此記には幸堂氏の句のみ出す事とせり、是は一番目が團十郎なら二番目は菊五郎、一番目が梅幸なら二番目が團洲、何方にしても遣らず脱さず打て占め、否でも應でも大入、義理にも挨拶にも何でも彼でも讀ませる、眼を塞ぐなら是で窓を張るぞといふ退引させぬ軍略と知るべし、併し兩人は團菊ときめて居るもの、白人眼には喜知六と翫太郎と見ゆる

も知らず、ソコは黑白見解を異にするところ、ハテ致し方もござらぬ、強て辨ずるも卑怯に似たる歟、幸堂氏の句の戀といふところより大ふなは大きな鮒でも取れしよりの所の名か大きな船なら直に大船といふべきにと云ながら切符を見ればおほふねとあり停車場にはふなとあり「手紙には狸臺には鯉を乗せ」といふ川柳點の格で如何でも能いに略されては困るなり、歴史など調ふる者には地名は大事なり、近ごろ此方の頭の字と其方の頭字と合せて何とか町とか村とか捏ちあげ兩所とも古名を失ふやうなヤツつけの御鹿末理屈が矢鱈あるやうなり大ふな大ふね古を正して一に定たきものなりと、此等の話に一時間ほど經ち

ホツ／＼乗手も集まるに力を得て停車場の内に入りしがまだ四十分、此の光陰を二東三文に賣氣になりしがイヤ／＼と幸堂氏享保頃の付合集を出すを共に讀て評するうち天運循環して終に三時卅分新橋發の汽車四時頃に来たりて、これに乗込む、國府津に至りてはかねての約束なれば神田川より詰め來たりし錦囊の口を開くに奇策妙計たちどころに浮かむ、箱根山にかゝりては入日を脊に負ひたる富士の山金色の後光輝きていと尊くもまたすぐれたる眺望なり、沼津すぐるころは、幸堂氏の只の山となりて暮たり早月富士の山、幸堂氏の句よく其の實境を穿ちたり、鈴川にて

漁火も心だのみや茂り蔭、幸堂氏の句よく其の實境を穿ちたり、鈴川にて

(三)

夜に入り八時半ごろ興津につく、千年屋より迎の人あり車あり、吼り猛るほどの悦びの勢ひにて千年屋に入れば自恃庵主與方ともく待つけて、よくお出なされた、大層御丈夫さうにおなりなされて、の外は辭義も口誼もなく一時の歡會百年の壽を延べ、勝讀十年の書ぐらゐの事にてはなし、自恃庵主久しく病みて一時は氣遣ふまでなりしを此地に轉地せられてより養生の功

看護の勞氣候のよきと相まちていと健かになられしは返すくも嬉しき事にて祝盃を擧げること限りなく、此宿の人々も共によろこびて款待されぬ、話は汽車の走る如く廻り、笑ひは波の音を止むるばかりなりし、と覺えたるまでにて後は知らず、三日の朝となりて眼の覺むれば、人間が放れたあどの狐の如く、クロリとしながらコソ／＼と床を脱けて忽ち海中に跳り入る

夏草をぬれて出けり朝の蝶

幸堂

とは此時讀れたるなるが何の意味やら分らず強てこれが解釋をなさんか天機をもらすのおそれなしとせず發句は他にも分らず自にも分らぬところが高いところと聞く、深く分別するは悪

し、海に入ると云へば勇ましけれど幸堂氏などはソロリ／＼と岩づたひに探り入りしにて蹲みて胸ぐらゐの靜なる潮に浴し、朝の景色を海より眺むればまた一入、濱傳ひに三保へ行かうか、寧そ此まゝ品川まで朝遡としやうかなど相談のうち、浪より上の身軀半分、朝風に慄へ上れば、身も投果さずして引かへせば、座敷は改まりて朝の設の馳走あり、此に十日も廿日も居たけれど急の思ひ立に日を切りて今日は暮ても箱根へ行き宮の下の奈良屋に養生し玉ふ素園翁を訪はんと思へば、惜まる、袖、惜しき宿、我ながら飽氣なく、午前九時八分に興津を發して東京の方へ向ふ汽車に國府津まで乗らんと立出づ、庵主停車場まで送

られ、奥方よりも飲むな〜と叱言の下から密と幸堂氏へ酒一  
 陶に此地の名産疊鯛と外に鯉の常磐煮を小壘に入れて國府津  
 までの間も退屈せぬやうにと渡さる、親身となれば怖いやうで  
 も甘いところの有るものなり、東京より僅に四十里、汽車で六  
 時半ばかりで来る所なれど、待迎へられるは心持よけれど、送  
 らるるは否な氣持のものなり、特に送るは出養生の旅の人、送  
 らるゝは旅に出るにあらで家に歸る者なり、勇氣少しくたぢた  
 ちと後歩みに見上れば箱根の方は雲重く雨持つ風の冷かなり、  
 此には急がぬ汽車早く、乗れば見かへるほどもなく興津は見え  
 で波白し、願は四年前に此の興津へ一宿し其折に同行一同命名

式を行ひ我は與太郎、幸堂氏は太良作と呼ばれ、今にも人に羨  
 まれ、私にも然るべき名を下されなと望まるゝ程なるが、此  
 で名がのいたけに太郎作與太郎その名の如くなりしも因縁  
 か、斯る由緒の地なるにまた一故事芳ならぬ方を千年屋に残す、  
 興津はまことに面白き所なりけり、沼津にて鮮辨當を入れ山北  
 にては鮎の鮮を褒め一は箱根の素園氏にとて買調へ、午後三時  
 ころ國府津に着く

明日よりは「箱根草」としてまた一二回御迷惑をかくべし中  
 に淨るりあり其役割は

意休 實はへまの平内左衛門

助六 實はへまの小四郎泰時

はこね草

(一)

在否を問ひ合せて後に出るの出ぬのといふは御白人方の話し、我々は其人に對してすら不來不見の悟ある黒人なれば、素園主が箱根へ養生にまゐられしと聞ればかりを心あて敵討に出つたる身の氣は安く、ナアニ路用が盡れば家來の娘が身を賣るといふ場を出しさへすれば能いのだ、落付く先が箱根といふだけの手掛りがあれば屹度本望は遂げると夕方湯本に馬車を下り、

何でも宮の下したの奈良屋ならやと聞いたが、幾許黒人揃ひにして此の草臥くたびれを引摺ひきずてセッセと上のぼつたところで「お出なさいません」を極きまられては堪たらぬ今宵こよひは湯本ゆもとに宿やどを取り明日あすゆるくと出立たべしといふ説せつもありしが、我身わがみになりて思おもふも友達ともたちが遠方えんぱうから來るに少すこの事ことで一夜逢ひとよあひおくれなば其その遺憾うらみいかばかりぞや、押おせく上のぼれく、此このカタ上のぼりを人力車くわんごとは白人しろくだよ、ナニサ友達ともたちが來るとなつては一分いっぶんでも遅おそくなつたのが知しると怒おこるが情じやうだよ急いそげく、と平生いっせいは二十五錢にじゅうごせんが極きまりと覺おぼえて居ゐるに三十錢さんじゅうせんとはり込こんで荷物にものと云いつては興津おきつで拾ひろつた名石めいせきと山北やまきたの鮎あゆの酢すしだけ眞ほんの荷物にものは人間にんげん二人ふたりカタリゴロくと引ひかれたるが、自恃じつち庵主あんしゆが「箱



根は雨だよ」の豫言効ありてポツ／＼と降り來たる、日は暮か  
 る尋ぬる先はだん／＼頼少なくなる事を考へ出す、車の上に  
 ガタつかされて胸は痛くなる少し歩かせて呉れと車夫に頼めば  
 此先は下で頂きますから其處までと云れる、ア、白人が羨まし  
 い、世の中兎角白人が目安くて能い、明日から白人の事だと呟  
 やくうち宮の下へ着き、幸堂氏車を走らせて奈良屋に至りて様  
 子を問ふ、此一刹那が大事のところ、蝙蝠傘を力杖にキツト車  
 上にて外見、曲りくせのついた眼鏡を直して待つところへ、幸  
 堂氏ガツカリの体にて出で來たり、疾うにお歸りになりました  
 とさと此のどうにの字を強く云はれしにも氣拔は知られたり

射損じを人にかたるな大矢數 幸堂  
 底倉の蔦屋といふは焼後木賀道の方へ新築して客あつかひ深切  
 なりと聞く、せめて此上は御手和かな所へ泊て貰ひたいと車夫  
 に増をやりて蔦屋へ着きしは灯を點してなりし、お生憎さま只  
 今御座敷の壁を繕ひ中でございますのでと兩隣挟み討の六疊  
 敷、まかぬ塗の乾かぬ跡あり、俄盲目に生壁とは眞に此事だ、  
 併し此の家は食せるものが能いよと予は一度來たりし事あれば  
 例の黒がりを云ひて借下物ほど聞けば、是もまたお生憎さまを  
 頭へつけて豆腐と雞卵ばかりでございますといふ、幸堂氏思は  
 ずホヤと叫びて予が顔を睨む如く見る、僕は山道をかたつかせ

られて腹が揉めて居るから今夜はどんな御馳走でもお断りだ  
 と、鉾先を避けて浴室に行く、浴室新しく廣くして氣持よし、  
 幸堂氏も一浴の後、此泉が持病に特效ありといふに大に元氣を  
 復し、もどめても來たかつたところだ是は二三日逗留だ此の湯  
 に限ると氣に入られたり、予は山勞れに半病人となり幸堂氏が  
 獨酌にて通を云ふを寐轉びて見るばかりわづかに幸堂氏一手加  
 減の鹽湯漬二椀に命を繋ぎしのみ、何しろ是では飲めないテと  
 獨言ちたる氏は俄に欣然と手を拍て有るぞく興津からの下物  
 が残つて居た何の事たスツパリ忘れたサア是れがあれば千人力  
 だぞと荷物の中より搜し出し、此夜は彌次さん一人御愉快なり

(二)

四日の朝雨を冒して木賀の瀧見に出づ、此瀧は先年も雪の夜に  
 兩人にて見に來たりし事あり上に登りて見ればわづかの水流な  
 るが斯く逆しまに落ちたぎりではすさまじく神々し、何事も勢  
 ひといふもの添はれば怖しくなるものなり、木賀の焼跡を見る  
 龜屋の神代杉の天井も灰となり新築麗しかりし伊勢屋のあとも  
 原と草生ひて湯の煙のみ雨の中に立つさま憐れなり、此二月は  
 特に居心よく、伊勢屋よりチャと駕をしつらへ乙女峠に雪の富  
 士を眺めたる寒さなど話し出して兩人少しく濕ばし

嘗く軒端なくて哀や花菖蒲

幸堂

伊勢屋の庭のあとに咲残りたるを見てなり、蔦屋に歸りて書を  
 讀み湯に入るあと欠伸のみ、襖どなりの五六人晝も床を敷きた  
 るまゝにて岩見重太郎の敵討、敵の加勢は千三百人で此方は二  
 人だと其の豪勇無敵さをゆるりくと話すに聞く人の受答いか  
 にも尤もらしく、これを耳にするほど引附らるゝやうに眠し、  
 折から物しとやかなる少女來りて晝の御菜は何に致しますと問  
 ふ、今日は罐詰の御厄介ならんと高を括れば、何が出来るねど  
 寝ながら聞く、御刺身に鱈の鹽焼にヤマメの魚田、と皆まで聞  
 かず兩人とも岸破と跳起き、夫は豪儀だ皆な持て來て酒も大急  
 ぎだと大きに氣を得たり、下物鮮けくヤマメは大き八寸に餘り

ことに厚味なり、昨夜シヨゲたる與太八の勇氣一時に恢復し、  
 いざや此の勢ひに湯元まで下らんと幸ひ雨の上りしを時と霧い  
 と濃くて雲の中を行くやうなるに甲斐々々しく出立ち荷を引擔  
 ぎて飛ぶが如くに山を下る、と見えたるは四五丁にて

蝸牛泊が知れてあればこそ 幸 堂

など、先づ此景色、むざと過ぎるでもあるまいが少し始まる  
 左れど下りなり道は雨に洗ひて清し左のみ鼻の穴を吹草にせず  
 して塔の澤へ着く、此處の藤屋といふにはまだ御厄介にならず  
 經驗の爲なれば一夜を此に明すべしと幸堂氏先達にて五時ごろ  
 泊る、先達の盡力効ありて予が一浴して來て見れば座敷も上等

の間どかはり、下物も君の氣に入りさうなものを命じたよ何だ  
 と聞のは白人だ萬萬僕が心得て居るからオイ姉さん出来たら私  
 に構ず先へ出して呉んなど例の如く通なり、志ばらくして持來  
 るを見れば刺身は赤き鮪なれど煮肴はイサキのやうな物なりハ  
 テ通がツたのは是かど眉を擡めて居るところへ浴衣で耳を拭き  
 ながらといふ意氣事で幸堂氏ズット入りオヤ魚が違つた是は何  
 だと云へば、ハイ鱧の子小鱧でございます、シタリ鱧の卵と思  
 った鱧の小さいのはと髭を捻るも可笑し、何でも江戸の事だ明  
 日は早く歸らうと、翌五日は午前五時半に飛び出し馬車がまだ  
 出ぬを待かねて風祭まで歩く、朝の景色まことによし、此にて

丁度馬車の後より來たるに乗り、國府津の午前九時何分に間に  
 合ひ、昨夜の蚤の残りの夢をフラリくと揺ぶられしが幸堂氏  
 は横濱にて齒の療治をするとして下車

よし切や鹽と眞水の別れ口

幸堂

雜沓中に別れて予は十二時過るころ小梅の住居に歸り、歸ると  
 共に先づ枕とりて勞れを休めしが、興津は波の音、箱根は溪の  
 音、我家はまた蚊の聲の夜に入りては沸くが如し、音は異なる  
 も聞く耳は一の夢なるこそ面白けれ

布 施 讀

(一)

江戸近き名所のうち下總の布施辨天は關東三辨天の一にして信者も多く道も六七里なれば一夜泊りの保養參もあり其角が句にも「玉椿畫と見えてや布施籠り」などあり三四十年の前までは繁昌なるどころなりしと聞く上に利根川圖志を見れば景花よきどころにて其繪には利根川を下に瞰て遙に筑波の山を眺め祠おどそかに丘の上の森茂く雁一行此洲先へおりんとするさまあり(繪をめては名所を覚え高輪へ来て此には牛車の傍に狗子が西瓜の皮にヂヤレて居る筈だ、左様云へば虹も見えないと疑ふが

即ち我黨の喜ぶどころなり) 又其處に附記して「戸頭の渡舟を望み曙山の櫻楓を眺めて頗ぶる勝景と稱するに足れり」とあるにかねて遊意のうごきあるに土浦線の涼車開けたるに北千住より先へはいまだ御荷物と相成らざるも何か進歩といふことに伴はぬやうなれば負けぬ氣の幸堂氏と約し五月廿五日午前六時四十何分南千住發の涼車に乗りて辨天參りと出たつ北千住、龜有、松戸、小金、柏と過ぐ此邊左右ともたゞ田圃のみにて今は田がへし早苗つくりまた植はじめたるどころもあり蛙の聲の涼車の響とあらしそふばかりなり、柏より我孫子の間少し丘めきて畑多く頬白雲雀の囀り面白し此間に手賀沼の縁を少

し見るところあり我孫子に下り出口より切符を渡して出たれども我孫子へは何方へ行くやら一向道も分かね畑中なり切符を受取る人の彼方と指さす方へ行けば此へ下りし七八人の一行は其先に行く郵便配達人に道を問ひて線路へ沿ひて細き道を進む、配達人は夫と引かへて畑中の小道を右へ折れたり、後より遙にこれを見たる兩人、大勢連のあとにやつかん配達人を道しるべにやせんとしはし談合したるすゑ老人の詞につき郵便の御供と決着し桑畑竹藪あばつかなくたどる、豫て兩人の智畧といふは下總國の繪圖で道をはかり、ソレ此が布施だから此の我孫子から下りて行くは一番近いに相違ない其先幾里あるか方角を何方

に取るかは汽車を下りて停車場前の茶屋へ休み緩くりと其處で聞ての事さと繪圖の土地の名を指で押へホラ此から此だ譯は無からうの軍配、我孫子は聞えた宿だし手賀沼の傍だから名物の鰻 鯰 などがあつたらう併し其處で參つてしまふと跡が茹るかラザットの事だよなど、常飲の先練、トコロが茶店どころか鐵道員の家居二三戸のほかはたゞ畑、コイツは驚く、オヤ郵便を見なくしたぞと急げば凡そ五六町にて宿らしい大通りへ出たり、左れども田に忙しき時の故か人氣少く藁屋の留守番に鶏が座敷へ上つて居るだけなり、此にも休むところはありさうもない兎も角も聞て見ると幸堂氏一家につき布施の道を問へばい

と深切に道筋を教へ瀛車の踏切をまた越えて畑道を右すれば久  
 寺家といふに出づ此にて其先はまた聞かぬべし布施までは此處  
 より一里にしては近し直其所なりとの事に兩人大にイキリ出し  
 近一里とは有難い餘り譯がなさ過て折角趣向して來た晝支度が  
 布施でまた朝飯か瀛車がザツト一時間まだ朝の七時半過ちそく  
 も九時に布施へ着くア、瀛車は便利な物だナアと大元氣にて教  
 への如く學校の横を曲り瀛車の踏切を越えて廣々として小高き  
 畑道にかゝる野薔薇眼に美しく雲雀耳に樂し

(二)

大沼か湖水の水涸て田に残りしと思はるゝところ多し麥桑の廣

野を下りて摺鉢の底の如き田の道を通るに苗代の水清く活々ど  
 音して次より次と低きに水の落つるいと涼し左右は岡にて廻り  
 たれば雨續きには此道忽ち川と流るゝならんと思ひながら景色  
 を褒めて不圖願みれば幸堂氏六七間後にあり腰を屈めて田の中  
 を覗く躰、錢を落したる青砥にもあらず蛙に見とれし道風とも  
 まがひたり、立かへりて何をなさると云へば、今功德をしたと  
 ころだ蛙に足を挟まれて蛙が飛かぬて居るこれは不思議と見れ  
 ば子供がいたづらに蛙の足を糸に縛りそれを草の根へ擲ませて  
 あるのだから其糸を取て放してヤツた蛙は靈のあるもの今夜あ  
 たり夢枕に立て今日の命の御禮だと金の埋ッて居るところか何

か知らせるに違ひないア、能い功德をしたとの話し、夢枕を書入の善根昔の蛙の草紙のやうな甘い事どころか今夜蛇に追はれる夢でも見てうなされるぐらゐが報だと打笑ひて此の摺鉢谷を越したるが何にしても最う一里近くも歩いたり久寺家は何所と草刈る人に尋ねれば、それソユ其所に見ゆる所といふ、我等に一向見えぬと指す方に行けばやがて三軒二軒また一軒と家見えそめて十四五軒も町に續く村に出づ、此等の人は目が能い眼光森の背にとほるといふべしだ偕此へ來れば辨天様は御隣家といふわけだらうと門に立ちたる人に向ひ、布施へは斯ゆきますかと幸堂氏無造作に問へば、其の人兩人の形をながめて後ち、辨

天なれば眞直では御損です此の先の細道を曲ツて一田圃こしら東の方へ上り麥畑道を突切て土屋津へ出て又聞ても出なさい此方が十町も近うございます、と是を傍聞せし我輩は飛上るほど驚いたり、直に行くより十町も近いといへばまだ此先二三十町は有るならんおまけにまだ土屋津へ行て聞けでは其先まだ十町の近道が有つた日にはと思はず空を見上ぐれば幸堂氏もチト驚きの形にて此から布施までどの位ありますと底を聞くと、ナニ半道少ですと答へは手輕なれど暑に此方は息ぎれの躰、禮を述て其道を下つ上りつするにいよく熱し、幸堂氏突然獨言して曰くア、錦祥女はうまいことを云つたと何故何を感じなさる



と云へば「繪圖では近いやうなれど」は實に名言だと恭れられ  
 たり、是は近頃の秀逸何でも眞情から出ることではなければ人は  
 感心しないと予も同感して然らば息休めと小松林の中に日をさ  
 けて休息す、此邊行き合ふもの馬に刈草をつけて曳來る者の外  
 更になし此草は田へ踏込みて肥料とするなり、此より一丁ほど  
 にて道は十字となりいづれへ向くか分からずすでに蝙蝠傘を立  
 て倒れた方への御馳になるところへ人の來るありて土屋津は左  
 の麥畑の耕地を突切ると知れ、漸やく足を運び出しやゝ七八丁  
 して三角のしかも本道らしきに出で但看れば「布施辨天これよ  
 り十丁」といふ標石あるに胸撫おろし其の方角をさして行けば

雨の時には如何して人馬が通るであらうと思はるゝ迂り泥の急  
 阪あり、是を下れば眼界あらたに曠く右に一堆の丘を見る、こ  
 れ辨天なり、眼前に其森を見ながら田の縁を曲りくゞて辨天の  
 門に到る仰いでみるに石段の上最勝閣と額したる山門巍然たり

(三)

石段を二級のぼりて堂あり結構壯嚴いかさま繁昌の靈地なりし  
 ならん、こゝ古へは四方皆な水にて孤の島山なりしといふ、相  
 對に山あり觀音を安置す即ち曙山なり梅も櫻も楓もありて眺  
 よし、左れども辨天山よりは大利根の流も筑波も見えずこれも  
 似顔繪で役者をちぼえて素顔におどろく類と我ながら笑はれた

り、山を下りて右手を見れば人家あり旅人宿らしければ此に憩ひて用意の辨當を開くべし九時とおもひし相場は十時半を過ぎ腹合ははや午後二時ともおぼしきに場所を選ぶべきにあらずと辨天山の腰をめぐりて町に出で常陸屋といふ宿屋に入り二階に上れば書入にした川は此處でも見えず表座敷より今來し道と辨天山躡山を眺めて是もさすがにと長い髭とチヨボく髭を捻り分けながら用意の酒を出し此の宿へも下物をたのむ、此地大利根に沿ふて小石一なき砂地なり我は去年出水の難に遭ひておぼえあれば此は水の難はなきかと給仕の女に問へば、有りますどもの、返事待設けたるごとし再々有るうちにも昨年のは此二

階際迄つきて見渡すかぎり海なりしといふ、左もあるべし其時はさぞ難義知らば見舞にも來べかりしにといへば、イエ私は近頃参たので水の事は話で聞きましたのとは折角の世辭を流されたり、辨天の参詣は少なけれど八十八ヶ所参りには東京の方も見えまますどかたる（弘法大師八十八ヶ所巡拜のうつし相馬郡の中に残り八十八ヶ所廻り、後に逢ひし一人も同じ参詣其外は耕地に出た人にあひしのみ他の往來の者に更に出合はず其寂しさ知るべし、此にて聞くも我孫子は一里、柏迄一里半といふ、柏は我孫子の一つ手前の停車場なり此より下りて近道なしに來るが車も

利てよかるべきか、此布施には車一臺のみ他には大盡の抱へ車  
あるのみといふ）鯉鱸は澤山取るゝ所とて鯉の洗ひと鱸の  
切身に生椎茸椀を出す味ひよくして價は酒一合を入れてわづか  
に三十二錢、以來鯉なら此へ來ることゝ寝めて此を出しは正午  
ころなり（布施參りは元祿の昔もはやりし事かさきに其角の句  
を出せしが元祿九年の若葉合を見れば堤亭の歌仙中に「花の時  
日待ごゝろの普施參り」とあり一夜泊りによき里敷ゆゑ籠り  
とて人の出しものなるべし）借是から叛反なり川を越して將門  
の故跡をたづね取手宿へ出てゆるりと遊び終汽車にて歸るべし  
と、布施より十町といふ戸頭の渡し場へと行く、折しも烈風に

て油断せば草原へ吹き倒さるゝほどなり、此十丁の間一面の原  
にて只茫茫と茅花の風に靡くのみ、此風にて大利根の渡しは危  
うし、今日は出來のよき旅にもあらねば此まゝ柏へ引かへし江  
戸へ早く着いて埃を拂ふ事にしては如何にと云へど、ナニ是式  
と幸堂氏強がりて行くに餘義なくあとにつく、川岸に至りつき  
て見れば波高く砂洲を打ちて岸際黒く泡立ちたり、見渡す向ふ  
の河原は小草砂原果もなくして人家見えず、遙の右手は丘に望  
み川に沿ひ一陣の雲氣天に沖りて陰々たり、孔明が魚腹浦の八  
陣なみに將門の八人盡不思議を殘すにあらざやとこれを望みて  
茫然たり

(四)

河原に松四五本丘めくところに碑ありて水神と彫りたり此に入りて此川無難に越させ玉へと黙禱し流失をおそれて半砂地へ引上げたる渡舟に乗れば渡舟小屋の傍の茶店よりドカ／＼と乗人出て人力車も二輛乗る中にも束髪手提黒縮緬午後四時半ほどの羽織に雪踏履きの婦人さへ活潑に飛乗り船人と面白げに高く物云交し、ア一寸行て来るのだ、と此凄じき波も馴顔なり、是より怖しき世の風波を渡り馴れたる人なるべし、これに驚きて兩人は面を見合せたるのみ、弱い音も出せねば默然、舟人二人で棹は張れど風強ければ舟は下へと流れて渡し場より一丁あま

漂ひ、ソレ／＼突張れ、といふ勢ひに棹の竹足らず、アハヤといふ間に棹は水底へ突立たるまゝ、舟人の手を放れ、舟は棹の上を越えてまた下へと流る、棹は中流に残り立たり、波をうける度水は激して舟にサット入り沫は衣を濡したり左れども斯る折の爲に作りし出洲ありて此に危うく舟止りて岸に着きぬ船中ハツト聲を立て悦び、船頭御苦勞と砂地へ飛び下り、偕彼の婦人はいかにと見るにボク／＼の砂地を飛ぶが如く走り車はその後に駆けて見る／＼彼の一陣の雲氣の中に消えたりけり、いづれを道とは分かねども其方につきて茫茫漠々の砂地を横に吹かれ立に吹かれて二三丁ほど歩めばや、遙に人里あり、一陣の黄雲

はすなはち此の茫々漠々の砂地より丘に向て吹きつくる風の色なり、砂塵漠々面を向くべきやうもなく前後にくれて立たるに忽然と傍らに人ありて、何方へお出なさる大師様お参りか子、と云ふ、渡りに舟どころか水天宮の御札と有難く、將門の城跡を見て取手へ出たいものです、が何う行きますと問へば、左れば此に三條の路あり右するを守谷といひて將門の城跡あり左に取れば取手にて一里に近し、中は戸頭にて進めば八十八ヶ所の巡拜所三四ヶ所あり我はその八十八ヶ所を巡るなり、取手へ行くは易く、守谷に出るは難しとの教へ、嗚呼此異人に此に遭はずば砂塵漠々の中を出ること能ふまじと伏し拜まぬばかりに喜び

守谷の古跡は風のない時再度企だつる事とし、早く取手へ行つて茶屋で砂を洗ひ川付の座敷で利根の浪を見ながらゆつくり命拾ひの祝宴を開かう、將門も思付の悪いところへ閉ぢ籠つたものだ何しろ取手へ一里に近いは前表宜しからず三里は有る覺悟で進むべし、と横に吹かれてさながら風の中を舞ふやうに丘について河原の末をさまよふ、此等皆去年の水に海となりしところなるべし、修覆したるばかりの土手一丘隔に六七ヶ所あり、土手の上は河原より吹上げて左は田と畑なれば其の風力の強さ少し油断すれば吹落さるゝほど、衣類は吹流しの鯉の如く風をうけてゴハくと鳴り、風を支へに身を横にしてヒヨコスカす

る有様、予は幸堂氏を見て、幸堂氏は予を見て、笑ひ譏り合ふて其身の状は知らず、風が一息吹き弱ると横にしたる身軀の支へなくなりてヒヨイと倒れかゝるなど我ながら笑し、此處は米の井、野々井などいふ村々なりと、例の蒨草つけたる馬の來る度に道を問ひ里數を問ひ行けどもく、土手が盡れば森、森を過れば又土手に、ホツト持餘して兩人一度に洪水に倒れしまゝの松の根に腰をかけて息をつく

(五)

風の和々を此にて待たんは憶したるに似たり今一吹いざ吹かれんと云へば幸堂氏大いに思慮を廻らしたる様子にて、先づ待ち

玉へと手を止め、今二人の前を行過し馬曳く女を追ひ、取手へはどれほど有るぞと委しく問ふ躰なりしがやがて馬曳女を連れて引かへし僕は馬で行くことにした此内儀さんにスツカリ聞いたが取手では銚吉といふのが第一の料理屋ださうだ僕が馬で先へ行つて萬々申付て置くから氣を丈夫にして緩々來玉へ銚吉に湯でもあると目口の砂を落すがナアと早や取手通なり此まで來てアト六七丁モウ其處に取手の鐵橋が見えて居るのに馬とは卑怯にも巧んだり、馬より僕の方が早いから僕が先へ行くよオイ内儀さん其の銚吉といふのは座敷から川が見えるか子と問へば見えませうよ裏の二階座敷からは、ム、川が見えれば銚へ通り

だ夫ぢやア馬でボク／＼やり玉へと予は身を起して勢ひよく歩み出し又一土手越せば學校がへりの子五六人歸る、取手へは幾許ある、と聞けば幾許ツてソコだよと後ろを指さす、ソコと云つても近い一里ありはしないかと熾るればサウダ三里もあるべいよと笑ふ此の子供達末たのもしき生立なり、斯くと行くこと三四丁全たく取手の町は四五丁ゆゑ此にて馬を待合さん宿入となるに二人揃はぬも見榮が悪からんと小高き所に上り四方を見ながら休む、休むこと半時ばかり幸堂氏の影もなし、ハテ不思議だソエ道も違ふまいが如何したナと望遠鏡取出して其方を見れば遙の先に幸堂氏、馬には乗らでポツリ／＼と歩み來る、是

はいかにも駈け下りて聲を掛けても返事なし、進み寄りて如何なされたと云へば顔をしかめて立止まり

杖蛙われ落にきと語るなよ

馬から落ちて落馬した、と弱られたり、エ、馬から落ちるなどゝ氣の利かない先祖の彌次喜多に對しても濟ぬわけだ又落ちる誓古もしないで馬に乗るといふ事が有るものかど力を付ければ、猿も木から落ちると云から人間も馬から落ちまいとは云れない併し手疵は浅い心配には及ばぬ銚吉で早く緩くりする事だと腰を撫で／＼取手の宿へ入り漸やく銚吉は探し當たれど評判どは案外何しろ飛込めと入つて見ると入込の茶漬屋、ドツカ川

の見えるところはないか裏二階は如何かと云へば、へエとケ  
 ンに案内する裏二階とは這はいかに只三疊の古座敷、此が裏二  
 階か川も何も見えないのではないかと云へば、川はズット離れ  
 て居ますよ下は彼の通りお客様が御一所ですから此が能うござ  
 いませうといふ、イヤ能くないが入つたのだ、何でも早いもの  
 二種ばかりで酒の能いの、と兩人は呆れて立たまゝ坐りもなら  
 ず、お酒は瓶詰の正宗に致しませうと怪しの美人が引下ツたあ  
 ど、ハテ如何したものだらう相馬の古御所も又甚だしいが腰が  
 痛むから直飛出しもならぬ先づ度胸を定めるさと埃をはたいて  
 幸堂氏が坐るときケラ〜と笑ひ聲して怪しの女二人まで現れ

しが皆幸堂氏大勢ひにて退治ついたられば其後は姿を見せず、予  
 は端折も下さず中腰にて一杯の息つき（此の銚吉魚は銚子より  
 來るとして新しくしてよし、奈良漬の香の物またよし、只此方の  
 當推量が悪かりしのみ）また三時何分の汽車に間に合ふ車を二  
 挺早く〜と夜汽車の歸りが日の有るうち命も有りて歸宅せし  
 は辨財天の加護とやいはまし

荒川堤の櫻

(一)

墨堤の櫻は霖雨の間に惜しくも散りかけたが此處は花がなくな



つても天氣さへ能ければ伸氣な人が山のごとく押しかけるから  
 葉ばかりながら餘處とは違ひますと櫻も氣が強いが梅若塚から  
 先になると花のうちでさへ見に来る人は少ない况や散つては我  
 々が鮒釣られにアラつくぐらゐだ、十二日の朝の雨今日行かず  
 ば明日は雪とぞ散りなましならまだしも葩も泥濘にユキかへさ  
 れて仕舞だらうと雨支度で花見舞と出かけた、墨堤の小雨の朝  
 櫻、毎日見るうちにもまた格別、こゝへ水神の八百松か梅若の  
 植半か但しは近頃出来た花月花壇へ泊り込みかの藝妓が一人現  
 はれたさすが藝妓だけに氣前を見せて傘なしで娼然もので歩い  
 て来たが右の手に折詰を提げて居たには興がさめた併しこれは

藝妓も據處なく持たせられたもので其先へはなれて商人體の客  
 が行たが案ずるに茶屋から車を命じては高し外でも藝妓づれで  
 は吹掛られるといふところから一人先へ行て車の直をつけると  
 いふ勘略かも知れない朝に折を持たせて歩くところから推せば  
 練味噌汁主義に相違ないと斯う極めて一苦勞消して梅若も境内  
 には入らずに堤を廻つて鐘淵紡績會社の前へ出た、此には蓬  
 く々とした頭へ綿屑をつけた工女が四五人國訛で聲高に争つて居  
 た是は折提の藝妓より又三四段櫻の取合せにはならない代物  
 だ、花の取合せになる代物は是でござりませうと細君が提籃の  
 中より洋盃を出して呉れたので大に莞爾といふものになつて沙

入の渡しを見渡すところに立止り傘をかついで絶景かな／＼と道風がツタが櫻樹は此で途切れてしまつた、元より今日は千住から先の櫻を見に出たのだから是れからが新舞臺と濕通る糠雨を物ともせず綾瀬の橋を西へ渡つて見ると當にした櫻はサツパリ花をつけない、夫も其筈根は堤の下草に賣められ梯は生次第幹は枯れて梯に花の咲いたのが有る程だ是では肥料もやるまい年々枯れるのを待つやうでいかにも憐げで是では大和魂も悲くなる、此堤の櫻は風受の加減が皆北東へ枝がさして居る、公孫樹は北へ曲るので植木屋はそれで方角を知るといふが此堤の櫻も兩側一様に傾むいて居る、此工合では千住から先の堤の櫻も

知れたものだナンボ風流でもカチク櫻を雨中に見ても廻られない寧ろ大橋から川蒸氣に乗つて歸らうかと云ふと、是まで濡れて此まゝオメ／＼歸られもしますまい櫻は見ずとも覺悟の通り荒川の堤を廻つて新渡しとやらから根岸へ出ませうと細君の勇氣、又洋盃先生にも激されてヨシ／＼雨は車軸を流すとも熊谷堤までも突抜けやうと千住の通りを横切ると此に梅毒検査の病院があつて今日はあたかも検査日なので母衣掛の二人乗が澤山来て衣裳も容姿も御粗末な美人が其の門前から下てシヤン／＼と飛込むのはトング御景物であつた此を通り越して荒川の堤へかゝると道は粘土で盛上げたので溷るといふよりは下駄の齒へ

吸付て一足ごとにウンと引こ抜くやうだ斯様な道を管て悪女の  
 深情道と名付けた事があるが今の検査美人を見て夫を聯想する  
 と世の若い人を厳しく誡めたくなる、道は斯う悪いが櫻は見わ  
 たすかぎり爛熳と咲連なりて美事なること墨堤にかはらず、北  
 寄の堤だけでコンナものかで歸ッたら嘸花神が笑ッたらう實に  
 實地を見ぬ事は話せぬものと感悟した

## (二)

心は花に奪られ足は泥濘に吸取られまばし立往生のところへ向  
 ふから始めて人が來たヤレ嬉しやで新渡しへは何町ほどござい  
 ますと聞くと左様サ此から三軒茶屋へ行てまだ先が其位あるが

其處に鍛冶屋があります夫から左へ取て堤を下り畑道をまだま  
 だ行て新渡しです道は三軒茶屋まで此通り悪うございます此下  
 へ下りて向ふをお廻りなされると道が能うございますと深切に教  
 へて呉れた、イヤ花を觀に來たのですから外を廻ッてはと云ふ  
 ど、ハ、アと云て感心した様子で行過ぎた、斯う立止ッて居る  
 うちに足駄は甲まで踏み込んだを漸やく引抜いて丁寧に一足ご  
 とに掛聲で花の雨花の雪の中を行く風流サといふものは随分草  
 臥たものだ、併しまた弓形に曲ッた堤に咲續いた景色は格別で  
 あつた、三軒茶屋からは道も濘らず人通りもあつて心強くなッ  
 たが花はだんく少くなる、それは櫻樹が少くなるのでは無此

邊からソロ／＼八重が植ゑ交へてあるからで新渡しへ曲る邊は  
 まるで八重ばかりでまだ紅くもならない是から鹿濱領家など、  
 川口手前まで二里ばかりの間八重が植續いて有るといふから其  
 盛りの頃は今より尙ほ一段の見物であらう、教へられた通り鍛  
 冶屋の前まで行て渡し道へ下りたが實は其手前六七間の處から  
 下りて能かつたので我ながら正直過たのを笑つた、此渡し道は  
 また新たに砂利を敷き詰たので足駄ではゴロ／＼して歩き悪い  
 幸ひと雨が小止なので上は氣遣がないばかりか、下から雲雀が  
 啼き上る、此雲雀を下物でと泥濘で御辭儀をしなかつた祝をし  
 たが思へば此先泥濘を見てニタ／＼と愛想笑をするやうな身軀

になりたくないと大に禁酒氣になつて先づ明日から實行しやう  
 といふ事で新渡しへ辿り着いた、渡し舟は一艘で向ふの岸にあ  
 るので茶店の人がオ、イと喚ぶとオ、イと應へてやがて船を寄  
 せるなどは淋たものだが此渡しを渡りこすと肥料製造會社が左  
 右にあるのはまた開けたものだ此で根岸へどの位あると道を聞  
 くと此でも何町とは云ず町家村から三河島へ出てツヒ其處だと  
 いふが是もなか／＼ツヒ其處ではない、道は同じく新砂利道で  
 足駄にはウンザリ道と云たいくらゐだ其のかはり砂利道にさへ  
 付いて行けば聞かずとも迷はないで日暮里の火葬場の前へ出る  
 此で道は左右に岐れ右は根岸左りは日暮里だ、日暮里の方から